平成３０年度
全国公共図書館研究集会
（サービス部門　総合・経営部門）

報告書

研究主題　超高齢社会の中で図書館の果たすべき役割とは

期　　日　平成３０年１１月２９日（木）・１１月３０日（金）

会　　場　石川県立美術館　（石川県金沢市出羽町２－１）

主　　催　公益社団法人日本図書館協会公共図書館部会
石川県教育委員会
石川県公共図書館協議会

主　　管　石川県立図書館

目　次

開催要項 ・・・・・・・・・・ 2

基調講演 ・・・・・・・・・・ 4
「超高齢社会と図書館」
筑波大学 図書館情報メディア系 教授　呑海　　沙織 氏

事例発表① ・・・・・・・・・・ 17
「親子で認知症を学ぶ会」について
福井市立図書館　　主幹　　岩城　　典子 氏

事例発表② ・・・・・・・・・・ 24
図書館と多世代の市民との協創から生まれるもの
つづき図書館ファン倶楽部　江幡　千代子 氏

事例発表③ ・・・・・・・・・・ 30
瀬戸内市民図書館の高齢者サービス
～回想法、「認知症にやさしい本棚」の取り組み～
瀬戸内市立図書館　館長　　嶋田　　学　氏

全体会（パネルディスカッション） ・・・・・・・・・・ 38
超高齢社会の中で図書館の果たすべき役割とは
コーディネーター：呑海　沙織　氏
パネリスト　　：岩城　典子　氏
江幡　千代子 氏
嶋田　学　　氏

情勢報告 ・・・・・・・・・・ 59
公益社団法人 日本図書館協会　副理事長　西野　一夫　氏

開催要項

１　研 究 主 題

「超高齢社会の中で図書館の果たすべき役割とは」

２　趣　　旨

日本では 2007 年に 65 歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合(高齢化率)が 21%を超えて、「超高齢社会」になりました。『平成 29 年版高齢社会白書』によると、高齢化率は 2036 年には 33.3%に達して、国民の約 3 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者になると推計されています。このような状況をふまえて、私たちは公共図書館と高齢者との関係を考えていく必要があります。

今回の研究集会では、現在図書館で行われている外部機関との連携や独自の取組みなどを通して、それぞれの地域の実情に応じた高齢者に対する図書館サービスのあり方や可能性を探り、「超高齢社会」の中で図書館が果たすべき役割を考える契機にしたいと思います。

３　主　　催

公益社団法人日本図書館協会公共図書館部会
石川県教育委員会
石川県公共図書館協議会

４　主　　管

石川県立図書館

５　期　　日

平成３０年１１月２９日（木)・３０日（金）

６　会　　場

石川県立美術館　　ホール
〒920-0963 石川県金沢市出羽町２－１　　TEL：076-231-7580

７　参　加　者

全国の公共図書館及び関係機関の職員、学校及び教育委員会の関係者、図書館活動の関係者ならびに図書館に関心のある方

８　日　　程

（第１日目）　１１月２９日（木）

12:00　13:00　13:20　14:50　15:00　17:00　18:00　20:00

受付	開会式	基調講演	休憩	事例発表	移動	情報交換会 ※1

※1 情報交換会は、ＫＫＲホテル金沢

（第２日目）　１１月３０日（金）

9:30　9:50　11:20　11:30　11:50　12:00

受付	全体会 （パネルディスカッション）	休憩	情勢報告	閉会式

※　今回は、図書館見学を実施いたしません。

９　内 容

（1）基調講演

演 題：「超高齢社会と図書館」

講 師：筑波大学 図書館情報メディア系 教授　呑海 沙織 氏

（2）事例発表

①「親子で認知症を学ぶ会」について

福井市立図書館　　主幹　岩城　典子 氏

②図書館と多世代の市民との協創から生まれるもの

つづき図書館ファン倶楽部（横浜市）　　江幡　千代子 氏

③瀬戸内市民図書館の高齢者サービス：回想法、「認知症に優しい本棚」の取り組み

瀬戸内市立図書館　　館長　嶋田　学 氏

（3）全体会（パネルディスカッション）

「超高齢社会の中で図書館の果たすべき役割とは」

コーディネーター　　呑海　沙織　氏

パ ネ リ ス ト　　岩城　典子　氏

江幡　千代子 氏

嶋田　学　　氏

（4）情勢報告

公益社団法人 日本図書館協会

＜基調講演＞

「超高齢社会と図書館」

筑波大学図書館情報メディア系

教授　呑海　沙織　氏

ただいまご紹介いただいた筑波大学の呑海と申します。今日は「超高齢社会と図書館」というタイトルでお話しします。皆さんのお手元にレジュメをお配りしていると思いますが、基本的にそちらに沿ってお話ししたいと思っています。少し順序は変えていますが、基本的なエッセンスはそちらの方に書かれていると思います。まず簡単に自己紹介をした後、「人生 100 年時代」「超高齢社会とは」「高齢者と図書館」「認知症と図書館」「超高齢社会における図書館」ということでお話ししたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

私はちょうど 10 年前に筑波大学に参りまして、教育職、研究者にシフトしたのですが、それ以前は図書館で働いていました。図書館で働いていた時期の方が、年数にすると倍ぐらいあります。ですので、半分以上はまだ現場の図書館員の気持ちが残っています。また、研究を進めるにしても、現場第一ということで進めています。これからもそういう姿勢で進めていきたいと思っているところです。

1. 超高齢社会における図書館に関する取り組み

まず、超高齢社会における図書館に関するこれまでの取り組みを簡単に紹介したいと思います。始まりはごく平凡な疑問からでした。日本は高齢化が進んでいるにもかかわらず、図書館で高齢者サービスがなかなか進んでこなかったのはどうしてだろうというところから、まず筑波大学の図書館情報メディア系という図書館情報学をしている領域で研究者が集まって、研究グループを立ち上げました。

そして、いろいろ資料なども網羅的に調べたところ、高齢者サービスあるいは高齢社会と図書館に関する論文はあるのですが、書籍はなかなかないということで、まず一緒に考えてみましょうということで『高齢社会につなぐ図書館の役割』という本を 2012 年に出版しました。これは日本における高齢者サービスに関わる図書館の初めての本です。そして翌年、公共図書館を対象とする高齢者サービスについてのアンケート調査を実施しました。この中にもご協力いただいた方がいらっしゃると思います。その節は、ありがとうございました。

このアンケート調査から分かったことは、三つあります。一つ目は、高齢者サービスのハードの面、例えば大活字本やスロープや拡大読書機といったものはそこそこ浸透しています。二つ目にソフトの面。例えば高齢者を対象とするイベントや講習会といったところはまだまだ伸びしろがあるということが分かりました。

そして三つ目は、公共図書館において利用者サービス対象としての高齢者の捉え方がさまざまであるということです。例えば、「高齢者といえども成人なので、成人サービスの枠組みで考えています」という図書館や、「障害者サービスの枠組みで考えています」という図書館、あるいは「高齢者サービスとして独立したカテゴリーとして考えています」という図書館、「高齢者の利用者が増えているので、高齢者向けのサービスをしたいけれども何から始めていいのか分からない」という図書館もありました。これは 2013 年の調査で、それから数年たっているので、今はだいぶ状況が変わってきているように思います。

その他、例えば人型ロボットの Pepper（ペッパー）を使って、高齢者と人型ロボットの親和性を見る調査、あるいは高齢者の情報の探索行動、図書館でどのように情報を探しているかといった調査なども継続的に行なっています。

また、2017年3月に「超高齢社会と図書館」というテーマで、国立国会図書館から委託を受けて調査を行ない、報告書を書きました。こちらは発行されてから1年半たちますが、この報告書を見たことがある方はどのぐらいいらっしゃいますか。ありがとうございます。感激です。なぜなら、こういうところでお話しするときによくお伺いするのですが、50分の1ぐらいの確率で手を挙げてくださることが多いのです。今日ははるかにそれを上回る割合で、大変ありがたく思っています。こちらの調査内容は、後ほど一部をご紹介しようと思います。ちなみにこちらは、Googleで「超高齢社会と図書館」と入れると、上位3番目ぐらいまでに出てきます。全文を公開していますので、もし興味のある方がいらっしゃったら、そちらをご覧いただければと思います。

2. 日本の図書館の課題

こういった調査や活動を進めていくと、超高齢社会における日本の図書館の課題がいくつか浮かび上がってきました。例えばサービス対象者としての高齢者の確立ということでは、特に「脱障害者サービス」が挙げられると思います。日本は、歴史的に見ると障害者サービスの中から高齢者サービスが生まれてきたので、障害者サービスの枠組みで捉えられがちなのも仕方がない面はあるのですが、一方で高齢者サービスすべてが障害者サービスに交わるわけでは当然ないので、やはりこのあたりは切り替えていかなければならないと思います。

特に、アクティブシニアへの目配りのところです。いわゆる元気な高齢者、高齢者というと怒られそうな方々の層があると思います。そういった方々へのサービス、あるいはそういった方々とどのようにサービスを展開していくのかという方向性についても後でお話ししようと思いますが、そういうところも重要だと思います。

そして、まだまだこれから広げていく必要があるものとしては、認知症支援があると思います。特に認知症の社会的スティグマ解消という点に図書館は寄与できるのではないかと思います。「スティグマ」とは、「烙印」というふうに日本語で訳されたりしますが、平たく言えば偏見です。例えば認知症になると何も分からなくなってしまう、あるいは本が読めなくなってしまうといった偏見です。こういったものに対して図書館は資料や講習会、イベントなどを通じて解消していく役割を果たすことができるのではないか、また、認知症の人や家族へのサービスも必要ではないかと思うところです。

課題の2番目に戻って、「高齢者のニーズ調査」です。「高齢者サービスを知っています」という図書館にも「どうやってそのサービスを開始されましたか」「高齢者向けの資料をどうやって選ばれましたか」とお伺いすると、実は調査をせずに何となくカウンターで「こういう本がよく借りられるから」という感覚的なもので提供されていることがまま見られます。実はその感覚的なことはとても重要なことで、ニーズと重なっている部分もままあるのですが、やはり調査に基づいたevidence basedもこれから求められるのではないかということで、ニーズ調査を2番目に挙げています。

そして、最後は「他領域・利用者との協働」です。これは私の今日の話の中核になっているものです。この「他領域・利用者との協働」というキーワードだけ覚えて帰っていただければ大変うれしく思います。

3. 超高齢社会と図書館研究会

このような課題を解決するために、2年前に「超高齢社会と図書館研究会」を立ち上げました。こちらは研究者だけではなくて、実務者、当事者の3者が同じ目線に立って何かを取り組む研究会になっています。研究者は図書館情報学だけでなく作業療法学、臨床心理学、老年看護学などの人がいて、実務者は図書館員が多いのですが、作業療法士、臨床心理士、司法書士、行政書士がいます。当事者では、高齢者はもちろん認知症の人とその家族なども研究会に入っていただいて、さまざまな取り組みを行っています。例えば「認知症にやさしい図書館ガイドライン」です。こちらは後ほど少しご紹介しようと思います。それから、「本の処方箋プロジェクト」は時間の関係でご紹介できませんが、認知症に関する本の内容を可視化して提供するプロジェクトです。

では、ここで皆さまへ質問が三つあります。恐れ入りますが、ご協力いただけますでしょうか。まず「高齢者サービスを実施していますか」という質問です。1番目が「しています」、2番目が「していません」、3番目が「分かりません」の3択でお願いします。まず、高齢者サービスを「実施している」という方。6割ぐらいですか。「していません」という方はどのぐらいいますか。10名ほど手を挙げられています。「分かりません」という方はいますか。力強く手を挙げてくださった方もいらっしゃいます。実は、「分かりません」というところに私は課題があると思っています。というのは、高齢者サービスとは何だと思いますか。例えば拡大読書機を置いたら高齢者サービスなのか、大活字本は高齢者サービスなのか、考えれば考えるほど障害者サービスとの重なりもあり、分からなくなってくるところが一つ課題だと思っています。

では次に、「認知症に関するサービスを実施されていますか」。こちらも「はい」、「いいえ」、「分からない」でお願いします。では、「している」という方はいらっしゃいますか。ぐっと減って10人ぐらいですかね。「していません」という方は7割ぐらいですかね。「分かりません」という方もいらっしゃいますね。「分かりません」という方も恐らく、何かしているようなしていないような、認知症に関するサービスとは何なのだろうというところがもしかするとあるのかなと思うところです。

最後に、「地域の高齢化率を把握していますか」。これは二択で、把握されている方はどのぐらいいますか。20名ぐらいでしょうか。把握されていない方は手を挙げないでおきましょう。ご協力ありがとうございました。

では、これから2本、短いビデオを見ていただきます。あえてその解説はせずに、まずは見ていただこうと思います。

―動画上映―

こちらは実在の人物ではなくてＣＧです。中国の新華社通信いわく、世界初のAIアナウンサーといわれるもので、数週間前にテレビで報道されていたと思います。

では、もう一つ見ていただきます。今度はがらっと変わっています。

―動画上映―

女子高生が新ブランドを立ち上げるに当たって協力したというものです。この二つのビデオは、皆さんの中では謎のビデオ2本になっているかもしれませんが、謎の解消は最後にしようと思います。

4. 健康寿命の延長と図書館の関係

最近、図書館がいろいろと着目されていると思うのですが、高齢者と図書館という文脈で言うと、11月8日のダイヤモンドオンラインに「図書館が『老人の館』に！　トラブル続発で逆ギレ、怒号も」という刺激的な記事が出ました。少し笑っておられる方もいらっしゃいますが、読まれた方もいらっしゃると思います。私もコメントを寄せたのですが、当初はこんな刺激的なタイトルではなかったのです。こんなタイトルが付くのだったらコメントを寄せなかったのにと思っているのです。図書館に高齢者が増えているというのを、タイトルでは困った感じで付けているのですが、この著者は実はそんな意図で書いているわけではなくて、高齢者の居場所としての図書館という論調で書いています。

こういった点で着目されていたり、NHKスペシャル「AIに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン」の「健康寿命」の回を見た方はいますか。結構いらっしゃいますね。こちらは私は見ていなかったのですが、翌日に「このテレビを見ましたか」とすごく連絡をいただいて、これは見なければと思って、後でオンデマンドで見たのです。健康寿命に関する回だったのですが、65歳以上の延べ41万人の生活習慣や行動に関するアンケートを分析して、健康に関連する項目と不健康に関連する項目、そして相互の項目の関係性のようなものをAIが分析したという番組になっていました。この結果で最も着目されていたのが、健康寿命と図書館にどうやら関係性があるら

しいということでした。

健康寿命、つまり健康に過ごせる寿命として重要なものといえば、皆さん何を思い浮かべますか。よくあるのが運動と食事です。実はそういった項目よりも、読書と健康が結び付いていたという結果でした。そして、さらに驚異的なのは、不健康要素との関連性が見られなかったのが読書だけだったということです。マイナス要因がないのです。だから、健康寿命と読書には何らかの関係があるのではないかということです。

どこがどう関係するのかというのは、人間が解明しないといけないところなのですが、この番組では図書館と関連付けて一つの解を出していました。というのは元気で寿命が長い県のトップが山梨県だったのです。山梨県は、人口に対する図書館の数が全国 1 位、あるいは図書館司書の普及率が全国トップクラスなので、こういったところが関連するのではないかという落としどころになっていました。さまざまに言われていて、図書館に行って本を探すことが運動になっていたり、知的な刺激があったり、そもそも本を読もうと思って図書館に行く人が健康だといわれていたりしたわけです。この中で出演者のが「高齢者を健康に保つには、病院を建てるよりも図書館を建てた方がいいんじゃない？」とコメントしていました。これで一部の図書館関係者には話題になったのです。

このように図書館もさまざまに着目されているのですが、やはり高齢化や健康といったところ、あるいは認知症といったところも図書館と深い関係がありますし、また今後ますます切っても切れない関係になっていくのではないかと思っています。それについては後ほどお話しします。

そんな中で人生 100 年時代という話なのですが、「2007 年に日本で生まれた子どもの半分は、107 年以上生きることが予想される。いまこの文章を読んでいる 50 歳未満の日本人は、100 年以上生きる時代、すなわち 100 年ライフを過ごすつもりでいたほうがいい」ということです。50 歳未満の方は手を挙げてくださいとは申しませんが、皆さんいかがですか。「ひっそりと何歳ぐらい生きるおつもりですか」と言ったら変ですけれども、私はぎりぎりな感じなのですが、これを初めて見たときにぞっとしました。100 年生きるとしたら、60 歳で定年だと 40 年、65 歳定年でも 35 年、どうするのかということです。

この考え方は、『Life shift（ライフシフト）：100 年時代の人生戦略』という、ロンドン・ビジネス・スクールのリンダ・グラットンさんらが書いた本にあるのですが、日本でもベストセラーになりました。実は、私たちの政策にもこの考え方が取り入れられています。さまざまなことが書かれているので、図書館に関係ありそうなところを少しピックアップしてご紹介したいと思います。

5. 高齢社会における生涯学習と公共図書館

こちらは、経済産業省の産業人材政策室の資料からそのまま取ってきました。何が変わるかというと、ステージとエイジの関連性が大きく変わるということです。ステージとは人生のステージ、エイジとは年齢です。

上のところに赤い矢印、青い矢印、黄色い矢印があります。赤い矢印の上に「教育」と書いてあると思います。私たちは、例えば教育は大体 25 歳ぐらいで終わり、その後卒業して、仕事をして、60 歳ぐらいになったら引退してというふうに、年齢とステージがほぼ一致した社会にあると思います。ですので、高齢者が図書館に来られたら、この方はリタイアされたのかなと何となく自動的に思うことがあるかもしれません。一方で、こういったエイジとステージが結び付いたものではなくて、3 つのステージがあるのですが、そのステージを行ったり来たりする、つまりエイジとステージが関連付かないのが人生 100 年時代だという論です。Explorer や Independent Producer や Portfolio Stage など、日本語に訳しづらいステージなのでちょっと残念ですが、こういったところを行ったり来たりするというモデルです。そして、この 100 年ライフにおいて教育、専門技能を高め、世界中の競合との差別化の必要性が増しているといわれています。

図書館とちょっと結び付けて考えてみます。こちらの考え方は、2017 年 9 月に「人生 100 年時代構想

会議」が発足して、内閣官房の人生 100 年時代構想推進室が進めていて、議論が重ねられているところです。先ほどのリンダ・グラットンさんもこの委員でいらっしゃいます。図書館に結び付けて言うと、生涯にわたる学びのさらなる必要性が、この人生100年時代においてますます重要になってくるということです。

そして、高齢者に引き付けて言うと、人生 100 年時代の高齢者には、先ほど Explorer、Independent Producer、Portfolio Stage という 3 つのステージがあると申し上げましたが、その人がどのステージにいるかはその人によるので、ひと口に高齢者といってもどのステージにいるかはすぐには分からないということが起こると思います。先ほど申し上げたように、エイジ＝ステージではなくなるということです。ですから、例えば「高齢者サービス」という言葉自体が死語になるかもしれない。というのは、高齢者という枠組みでますますくくれなくなるかもしれない。そういうことで、利用対象者の枠組み自体も考えなければならない時代が来るかもしれないということです。

6. 超高齢社会とは何か

では、高齢社会といわれている中で、超高齢社会とは何なのかということを少し見ていきたいと思います。

まず、このグラフは日本の高齢化率を表したものです。青いグラフが生産年齢人口の割合を表したもの、オレンジのグラフが高齢化率を表したものです。そして点線のところが、私たちが今いるところです。これより向こう側は今まで来た道で、点線よりこちら側はこれから行く道で、推計値になっています。これを見ると、高齢化率はどんどん上がっていくのに対して、生産年齢人口はどんどん下がっていることが見て取れると思います。

このグラフ自体が日本の高齢化の特徴なのですが、もう一つ日本の高齢化の特徴があります。それは高齢化のスピードです。高齢化率が 7%を超えてから、倍の 14%に達するまでの所要年数を倍化年数といいます。そこに到達するまでにかかる時間です。例えばフランスは 126 年、スウェーデンは 85 年、イギリスは 46 年、ドイツは 40 年です。この流れでいくと日本はもっと短いだろうと思うかもしれませんが、そのとおりで、24 年です。特にフランスと比べると、急激な勢いで日本の高齢化は進んできたことが分かると思います。ここから見て取れることは、急激に進んだために日本社会の仕組みが高齢化になかなか対応し切れてこなかったかもしれない。もっと言うと、私たちの意識も急激な高齢化に付いていけていないところがあるかもしれないということです。

そして、先ほど日本の高齢化率は高いと申し上げましたが、皆さん、日本の高齢化率は世界で何番目かご存じですか。これも 3 択でお願いします。世界第 1 位だと思う方、2～5 位の間だと思う方、6 位以下だと思う方ということでお伺いしたいと思います。まず初めに世界第 1 位だと思われる方はどのぐらいいますか。15 人ぐらいですね。では、2～5 位ぐらいだろうと思われる方はどのぐらいいますか。ほとんどですね。では、6 位以下だろうと思われる方はどのぐらいいますか。3 人ぐらいですね。

では、ちょっと見ていきたいと思います。こちらのグラフは「高齢社会白書」から取ってきたのですが、こちらのグラフは欧米と日本を比べたグラフ、こちらがアジアと日本を比べたグラフです。先ほどと同じように、真ん中が現在で、この線より向こう側が過去、この線よりこちらが未来です。日本は、赤いラインです。今も 1 位であり、今後も 1 位を独走しています。一方で、アジアも見てみると、同じように上に躍り出ている赤いラインが日本です。今も 1 位であり、今後も独走するというのが日本が置かれた位置です。つまり、世界第 1 位ですし、今後も 1 位を独走するというのが日本の置かれた高齢化の現状です。

つまり、「高齢社会白書」などを読んでいると、世界のどの国も見たことがない高齢社会を日本は迎えているという書き方をしています。世界各国は、日本がこの高齢化にどのように対応するかを虎視眈々と見ているといえます。一方で、私たちが高齢社会のモデルをつくって、それを世界に提示するチャンスでもあると思います。図書館の世界というのは、

例えばアメリカの図書館はこんな感じだった、イギリスの図書館はこんな感じだったというふうに、海外から輸入してくる面があると思うのですが、こういった高齢化や認知症といったところは、もしかしたら日本がモデルをつくって世界に提示できる領域ではないか。そのように、悲観的ではなくチャレンジングに考えることもできるのではないかと思っています。

7. 高齢者の図書館ニーズ

では、今度は高齢者に引き付けて見ていきたいと思います。これは2012年の経済広報センターの「高齢社会のあるべき姿に関する意識調査報告書」から取ってきた数字です。高齢者になったときに利用したい施設として挙がっているのが銀行、公共交通で、次いで図書館が75%で3位につけています。銀行や公共交通などは生活に密着しているものなのですが、その次に図書館が来ているのはかなり大きなことだと思います。

では、どのような役割が図書館に求められているのか。こちらも2012年のものですが、超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会が出している「長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ　『幸齢社会』～」からのものです。「幸せな齢」と書いて幸齢（こうれい）社会と読ませています。こちらの中で、図書館が1カ所だけ出てきます。その行間を読み解くと、図書館に求められている役割を二つ読み解くことができます。一つは、高齢者の学習拠点としての図書館です。こちらは、これまで図書館が取り組んできたことですし、それほど目新しくないと思うのですが、もう一つは高齢者の生きがい創出の場としての図書館です。

どういう文脈で出てくるかというと、「豊かな知識・経験を有する高齢者に活躍してもらえる機会を設定するなど、高齢者の生きがい創出を図る取り組みを推進していく必要がある。例えば図書館における読み聞かせ教室の講師など」と書かれています。こういった生きがい創出の場としての図書館というのが求められているということが分かるのですが、ではなぜ図書館なのかというところはこの後お話したいと思います。

先ほど国立国会図書館のレポートをご紹介しましたが、こちらで高齢者の方を対象として図書館のニーズに関する調査を行った結果を少しご紹介したいと思います。インタビュー調査の結果、高齢者のニーズを大きく六つに分けています。こちらは全てレポートの方に掲載していますが、今日は時間の都合で「資料・情報へのアクセス」、「場としての図書館」、「主体的な社会参加」という三つについてお話ししたいと思います。

まず、資料・情報についてですが、電子書籍への興味はかなり大きかったです。例えば「なぜ電子書籍に興味を持つのですか」という質問に対しては、電子書籍は文字が大きくなったり、読み上げてくれる機能が付いたりするのは聞いたことがあるのだけれども、何をどうやって自分で導入したらいいのか分からない。だから、「電子書籍を実際に図書館ですぐ使えるようなものを目につくところに置いてもらって、電子書籍の使い方を教えてもらえると使いたいのに」という声がありました。

また、大活字本も半々に分かれました。皆さんも図書館で大活字本をよく使われていますか。お伺いすると、よく使われている図書館と、全然使われていない図書館で結構分かれるのです。高齢者の方に伺っても「大活字本は字が大きいから愛用しています」と言う方がいらっしゃる一方で、「大活字本なんて絶対に読まない」と言う方がいらっしゃいます。「どうしてですか」と聞くと、重いというのもありますし、タイトル数がそんなにない。そのあたりはそうだろうなと思うのですが、結構出た意見としては、大活字本を読んでいること自体が「イケてない」ということです。ですので、大活字本のコーナーに行くのも何となくうれしくないし、大活字本の前にたたずんでいる自分をあまり見せたくないというご意見もありました。

そして、OPACなのですが、こちらは皆さんかなり使っておられます。ご自宅からもですし、図書館の中でもまずOPACを使って資料を探しているので、浸透していることが分かったのですが、一方でなかな

か使いづらいのです。特に、本は探しやすいけれど、雑誌は探しにくいことが分かりました。こういった点は利用者の意見を取り入れながら、なかなか難しいですが、改良する余地があると思いました。

また、宅配サービスなども、図書館に来られない方へのサービスとして提供している図書館が多いと思うのですが、こちらも実は盲点があることが分かりました。宅配サービスも、図書館の方が届けるタイプと、地域と連携して地域の方が届けるタイプと、宅配便や郵便などで送るタイプといろいろあります。ここの図書館は宅配便で送るタイプだったのですが、高齢になって大きな家に住んでおられる方だと、宅配便の方がチャイムを押しても、部屋の奥から玄関に行くまでに時間がかかり、ドアを開けて出た頃には誰もいないというのを繰り返してしまいます。結局、受け取れなくて、宅急便の人にも申し訳ないし、図書館の人にも申し訳ないし、なかなか使えないという声もありました。ですから、サービスをどうやって届けるのかというところは考える余地があると思います。

また、朗読会や紙芝居などのイベントがあったときに、ちょっとのぞいてみたいと思うそうなのですが、「朗読会」とだけ案内しても誰向けのものか分からないので、例えば「大人のための」と付けてくれると参加しやすいという声がありました。実は、「大人のための」がポイントで、「高齢者のための」ではないところがポイントです。というのは、「高齢者」という言葉をネガティブに感じる高齢者がいらっしゃるからです。

一方で、高齢者は自分のことを高齢者と思っていなくて、実年齢と自分が思っている年齢の乖離が、年齢を重ねるごとに大きくなるといわれています。例えば、皆さんは自分の実年齢と、自分が何となく何歳ぐらいと思っている年齢は一致していますか。うなずいている方もいらっしゃいますが、私も 10 歳ぐらい離れています。もちろん、若い方に離れています。これが年を取ると、もっと離れていくそうです。ですから、高齢者といっても、その人は高齢者と思っていないのです。つまり、「高齢者サービス」と銘打ってサービスを提供しても、高齢者に届かないかもしれません。そういうことから、ネーミングは大変重要なところだと思います。

そして、「場としての図書館」に対するニーズとしては、「知的な空間」、「安心して過ごせる空間」といった、図書館のイメージに関するものがたくさん出てきました。これらはやはり図書館のブランドだと思います。先ほど図書館での生きがい創出の話をしましたが、例えば図書館で読み聞かせや講演会は、知的な空間であるからこそ、より生きがいにつながるといえます。なぜなら、先ほどの大活字本のところでもありましたが、「知的な空間で講師を務めている自分はイケている」という文脈です。図書館で何かをするというのは、中にいるとなかなか分かりづらいのですが、やはり特別で誇らしいことであり、図書館でこういう講師をしたと言うと、「すごいね」と言われます。そういった場所が図書館なのです。こういったブランド力は、後から付けようと思ってもなかなか付けられません。ですから、私たち図書館関係者は、意識してこういったところをアピールしながら、さまざまに活動していくといいのではないかと思います。

また、司書との会話があります。この方は一人で住んでいる方だったのですが、一日の中で司書との会話が唯一の会話だということで、図書館に行く一つの理由として「司書さんとしゃべることだ」とおっしゃっています。こういうところでそういう話をすると、もれなく苦笑が出るのですが、実際のところずっと同じ人がカウンターを占有したり、朝から電話をかけてきて 1 時間ぐらいずっと同じ話をされて、「どうしたらいいですか」という相談を結構受けたりするのです。本当に生きる糧ぐらいに思っている方も結構聞いたりします。一方で、お仕事があると思うので、こういったものは例えば傾聴ボランティアの方と連携するなどしてサービスをしていく道もあると思います。こういったところも、何となく安心して過ごせる空間、信頼感があるから何となく話せてしまう空間という、図書館ならではの部分もあるのではないかと思います。

最後は、「主体的な社会参加への意欲」です。こちらは、私が感動した部分なのですが、そのままコメ

ントを抜き出してきたのでご紹介したいと思います。60 代前半の女性の方、「高齢者にサービスを与えるのではなく、もっと高齢者が参加できることがあればいい」。60 代後半女性の方、「ギブ・アンド・テイクではないが、一つ何かしてもらったら一つお返しする。年を取っても、何かしてもらうばかりでは充実感がない」。60 代後半男性の方、「これからは高齢者が培ってきたものを披露し、クリエイティブに何かを創造する場として図書館が関わっていくことが望ましい」。こういったコメントをいただきました。これは「図書館に何かしてほしいことはありませんか」という質問から出たコメントです。図書館には資料もたくさんあるし、居心地もいいし、何だかちょくちょく来たくなるから、特に何もしてほしくない。逆に、私たちが何かしたい、できることがありますという話です。こういったところから、先ほど高齢者の生きがい創出という話がありましたが、実は高齢者の側からもこういうニーズがあることがその調査で浮かび上がってきました。

8. 認知症と図書館

では次に、認知症と図書館に移りたいと思います。先ほど「皆さんの図書館で認知症に関する取り組みをされていますか」というところで手を挙げていただいたのですが、認知症に関する取り組みは、日本では一部の図書館を除いてまだ始まったばかりという状況だと思います。そういう意味では、今日これから行われる事例発表は、大変先進的な事例ではないかと思いますが、なぜ認知症と図書館なのかというところをちょっと見ていきたいと思います。

そもそも、皆さん認知症を多分ご存じだと思うのですが、「認知症を説明してください」と言うと、実は難しくないですか。認知症とは、脳の一部が変化することによって、いったん発達した記憶力や判断力、実行能力や会話能力などの認知機能が持続的に低下した状態のことで、それらの認知機能の低下によって、社会生活に支障を来すような状態になることが多いとされています。この定義は、後でご紹介する「超高齢社会と図書館研究会」でまとめた「認知症にやさしい図書館ガイドライン」で行ったものです。こちらは、さまざまな観点から認知症に携わる専門家、例えば認知症へのアプローチとして薬物療法的なアプローチをするのか、非薬物的なアプローチをするのか、あるいは身体的なアプローチをするのか、心にアプローチをするのか、さまざまなアプローチがあると思いますが、そういった多方面にわたるアプローチをする方が集まって定義を作ってくださいました。

このガイドラインに書いてある定義は 4 行程度のものですが、実はこの定義に収まるまでにかなり長い時間をかけて侃々諤々と議論が闘わされました。つまり、見方によってどの部分をどう表現するのかというのが少し異なりますし、あるいは時代によって少し定義も変わってきています。特徴としては、脳の一部が変化するという器質的な変化があるということです。つまり、単なる精神疾患ではないということです。

それと、「いったん変化することによって持続的に低下した状態」と書かれていますが、少し前の認知症の定義では、器質的変化が不可逆的（戻らない、治らない）と書かれているものもあります。でも、今の研究では、不可逆的ではないものもあることから、「不可逆的」が定義から外れています。ですので、例えば図書館で本を提供するにしても、古い本を置いておくと、一昔前の定義を見て認知症の方が絶望されることも実際に起こっています。それは若年性認知症の方だったのですが、図書館で借りた本を読んだら、「若年性認知症になったら 5 年たったらだんだん何も分からなくなって、8 年後には死にます」と書いてあったそうです。それで、その方は絶望的になって、「なぜこんな本を図書館に置くんですか」と言われました。図書館は人の人生に直接的には影響を与えないと思いがちというか、私はそう思っていたのですが、実はそうでもないと思います。特にこういった認知症などはセンシティブなところだと思います。

認知症の症状として、中核症状と周辺症状に分けて論じられています。こちらはどの認知症関係の本にも出てくるのですが、簡単にご紹介すると、中核症状として認知機能障害というものが現れます。例

えば記憶障害であったり、判断力低下であったり、見当識障害（今自分がどこにいるのか、今がいつなのかが分からなくなる障害）といったものの周辺症状として、抑うつ、興奮、徘徊、睡眠障害、妄想といったものがあります。

今日お話ししたいのは周辺症状の部分です。周辺症状は人によって現れ方が異なるといわれています。そして、その人の行動や心理状態が大きく関連するといわれています。この周辺症状はBPSDといわれるのですが、満たされていないニーズの反映といわれています。つまり、その環境によって症状があまり良くない方向に出るのか、あるいは抑えられるのか、出ないのか、そういったものに影響されるのが周辺症状です。平たく言うと、どのように対応するかによってその人の症状の出方が異なるということです。

最近、図書館に高齢者の方が増えているとか、もしかして認知症かなと思う利用者が増えているという話をよく伺いますし、そういった方が図書館でトラブルを起こす例があります。そういった場合、どうしたらいいですかというご質問もよくいただきます。そういったこともよくよくお話を聞いてみると、もしかして対応が違ったらトラブルになっていなかったかもと思うケースもまま見られます。認知症の人への対応の仕方という本、あるいは高齢者への対応の仕方という本はたくさん出ています。そういったもので、どういうふうに接するのかを押さえておくことは重要だと思います。

それで、こういうところでお話しするときによく言うのですが、「迷惑利用者」という言葉があります。迷惑利用者は図書館の外から来るのではなくて、もしかすると図書館の中で生み出されているかもしれません。特に、利用者の方と対応される方は、今後ますますそのことを意識しておく必要があるのではないかと思います。この考え方としては、Person Centered Care というものが日本にも入ってきています。これは何かというと、ある人が認知症になったら、その人の全てが認知症の人というカテゴリーに入れられる傾向が何となくあるといわれていますが、そうではなくて、元々その方にはすごい歴史があって、人間関係もあって、膨大な背景があって、単に認知症になったという捉え方です。言葉で言うと「認知症を持つ人」ではなく、「認知症を持つ人として」という、なかなか言い分けが難しいのですが、その人らしさを尊重することが必要であるといわれています。

では、どういうふうに接するのかということで、これはやってはいけない行動として挙げられているものです。全部は読み上げませんが、例えば「差別すること」、「非難すること」、「急がせること」、「中断させること」、「分かろうとしないこと」といったことは、特に急いでいたりするとなかなか難しいと思います。一方で、そんなに特殊なことは書かれていないと思います。「人として接するには」というところにつながっている行動ばかりだと思います。特に、急がせてしまうと余計に先ほどの周辺症状などが起こることがあります。認知症の方に「どういう図書館サービスが欲しいですか」とお伺いしたときに、スーパーなどでスローレーンがあります。会計をするときに急がなくてもいい列です。「図書館でもカウンターにスローレーンを設けてもらうと、本を借りるときも急がなくていいし、うれしいのですけどね」という話が出るぐらい、急がされたり、急がないといけないという状況はなかなか難しいようです。

9. 地域包括ケアにおいて図書館が果たす役割

では、認知症高齢者はどのぐらいいらっしゃるのか。よく使われる数字は、2012年で7人に1人、約462万人です。これが2025年になると5人に1人、約700万人です。これは団塊世代が75歳以上の後期高齢者になる年で、割合が増えてくるのです。「認知症700万人時代の到来」という雑誌の特集が組まれたり、800万人、1000万人ともいわれたりしています。

このような中、日本では認知症の総合政策が推進されています。新オレンジプランというものです。新があるので旧オレンジプランもあるのかというと、実はあります。2013年に旧オレンジプランが策定され、新オレンジプランは2015年です。特徴としては、厚生労働省だけではなくて関係府省庁、内閣官房、内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、

文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省と協働して策定しています。文部科学省も入っています。つまり、あらゆる領域が携わっていかなければ、もはや認知症に関する課題には取り組めないということを如実に表しているかと思います。実はそのオレンジプランは厚生労働省が出しています。この骨子では、「認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良い環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す」とされています。

新オレンジプランには、七つの柱といわれるものがあります。全ては触れませんが、例えば認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進が第一の柱として挙がっています。こちらは一番初めに申し上げた認知症の社会的スティグマの解消にも通じるものだと思います。本や雑誌、あるいは講演会やイベントを通じて、認知症への理解を深めるための普及啓発が図書館として寄与できるのではないかと思うところです。この後の事例発表でもご紹介いただけると思います。

また、5番目に「認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進」もあります。こちらも、地域に根ざす公共図書館として寄与できるのではないかと思います。

こういった考え方の背景としては、地域包括ケアシステムというものが進行しています。こちらについてはあまり詳しくは述べませんが、住まいが真ん中にあって、高齢者あるいは認知症の人が自分らしく生きることが基本になっていて、医療であったり、生活支援であったり、介護といったところが連携しながら支える図になっています。そして、これらをつなぐ存在として地域包括支援センターやケアマネジャーがいるという図になっています。

この考え方の一つ特徴的なものは、サービスの提供者と利用者、支える側と支えられる側という画一的な関係性を超えて、住民が共に支え合う地域づくりというところにあります。つまり、高齢者になったからサービスの受け手になるのではなくて、高齢者も地域でサービスの提供者となる、認知症の人はサービスの受け手だけではなく、地域でサービスの提供者となる。つまり、お互いに支え合うということです。このように、支える側に回ることによって生きがいにつながったり、自己実現につながったり、あるいは認知症に関して言えば認知症の進行抑制につながったりといった効果も見られるといわれています。

こういった地域包括ケアの中で図書館がどのような役割を果たすのかということですが、図書館は住まいの身近なところで強みを生かす必要があると思います。図書館の強みとは何かというと、社会教育、文化、まちづくりの観点から知識・情報を媒介とする社会的基盤・資料を提供する役割を持っています。全国に3,300の拠点があり、誰もがいつでも無料で利用できます。こういったところは、私たち図書館関係者には当たり前なのですが、改めて図書館関係者以外の方にこういうお話をすると、大変驚かれます。

そして、先ほどのブランドのところにつながっていくのですが、長い歴史を持っています。私は大学で図書館文化史論という授業を持っているのですが、図書館文化史論は紀元前3000年から始めます。図書館というシステムは、世界的に見ると数千年続いています。そして、特に日本では図書館というと「それは何ですか」と言う人はあまりいらっしゃらないと思います。図書館というだけでどういうものか分かります。これは大変大きなブランド力だといえると思います。また、全国に3,300というのもすさまじい数字で、図書館関係者以外の方にお話しするときに使うのですが、「マクドナルドより多いですよ」と言うと大変驚かれます。こういった図書館の強みを生かして、地域包括ケアシステムにも関わることが重要ではないかと考えています。

10. 「認知症にやさしい図書館ガイドライン」

一方で、「図書館で認知症に関わるサービスをどのように提供したらいいのか分からない」、「どういう方向性で進めていいのか分からない」という声をたくさんいただいたので、「認知症にやさしい図書館ガイドライン」を超高齢社会と図書館研究会で策定、発表しました。先ほど西野副理事長からもご紹介い

ただきましたが、昨年の図書館大会で発表しました。超高齢社会と図書館研究会のメンバーが議論を尽くして作ったガイドラインです。

タイトルに「認知症にやさしい」という言葉を使っています。皆さん、「認知症にやさしい」とはどんなイメージ、あるいは何を意味すると思われますか。よく「認知症の人にやさしくすることではないですか」と聞かれるのですが、実は認知症の人にやさしくすることが「認知症にやさしい」という意味ではありません。「認知症にやさしい」とは、あらゆる人が認知症について理解することで、認知症の人が理解されている、存在価値がある、地域に貢献することができると感じることができる状態です。こちらも「認知症にやさしい図書館ガイドライン」での定義に使っているものです。こちらもネットで全文を公開しています。Google で「認知症にやさしい図書館」と入れると、1 番目か 2 番目ぐらいに出てくると思います。

この考え方は、もともとヨーロッパから出てきたものです。英語で Dementia Friendly という表現が使われています。ただ、これを日本語にするのもなかなか難しく、今は 3 パターンぐらいあります。Dementia Friendly は「認知症にやさしい」の他に、「認知症の人にやさしい」、「認知症フレンドリー」と訳されているものなどが見られます。ここで特徴的なのは、「認知症の人が」というところです。「認知症の人に」何かサービスをするとか、「認知症の人に」何をするのかという、認知症の人を目的語に持ってくるのではなく、認知症の人がどう感じるのか、認知症の人が何をするのかというふうに、認知症の人を主語に持ってくるのです。そういう考え方が根底にあるのが Dementia Friendly という考え方です。

レジュメにも掲載しましたが、こちらはよく引用されるイギリスのアルツハイマー協会の図です。Dementia Friendly はこういうことを意味すると書いてあって、町の図が書いてあります。例えば病院、学校、ビジネスの場、交通などあらゆる領域が Dementia Friendly である必要があることを端的に表した図です。イギリスなどではヒースロー空港が昨年か一昨年、世界で初めて「認知症にやさしい空港」を標榜するというものを出していました。その後、ヒースロー空港に行ったのですが、どこが Dementia Friendly かちょっと分からなかったので、空港の職員の何人かに「Dementia Friendly はどこで分かりますか」と言ったら、「何ですか、それ」と聞かれて、「ああそうか」と思って帰ってきたのですが、そんな側面もあります。

「認知症にやさしい」は、Dementia Friendly Community というふうに、後ろに Community を付けて表現されるものがあります。これはヨーロッパで生まれて、日本にも大きく影響を与えている考え方なのですが、筑波大学の河野先生が端的にまとめられています。もともと認知症は疾患に帰結し、例えば認知症になったらどういうふうに投薬して治すかとか、どう介護するかといった医療、介護、福祉の領域で考えられていたのですが、今はそうではなくて、より広範、ほぼ全てです。認知症の人とその周辺、あるいは環境との相互作用により、顕在化する社会的な課題として捉えようというのが、今の認知症に関する課題です。生物、心理、社会というとほぼ全て網羅するところですが、そういったあらゆる領域が認知症に関して課題として取り組む必要があるというものです。そして、先ほど見たように、私たちの日本社会はどの国よりも高齢化が進んでいます。高齢化と大きな関係性があるのが認知症です。

11.「認知症にやさしい図書館」とは何か

認知症にやさしい図書館とは何なのか。もう一度おさらいになってしまいますが、認知症の人にやさしくする図書館でも、認知症の人のみを対象とした図書館でもありません。認知症にやさしいコミュニティをつくり、支える図書館が認知症にやさしい図書館です。認知症にやさしい図書館が実現すれば、実は全ての人にやさしい図書館、全ての人が使いやすい図書館、居心地のいい図書館になるのではないかと考えています。

では、この「認知症にやさしい図書館ガイドライン」の内容を少しだけかいつまんで紹介したいと思います。全 7 章です。どんな章を作るかというのもかなり迷いました。また、どういう順番で何を配置

するかというのもかなり議論になりました。初めにガイドラインの目的をまず書いて、その次に「認知症とは」というのを書いていたのですが、最終的に「図書館とは」を先に持ってきた方が良いのではないかということになり、そういう順番にしました。

図書館のガイドラインなのに、「図書館とは」が初めに来るのは何となく違和感があったのですが、先ほどご紹介したように、研究者、実務者、当事者といういろいろなバックグラウンドを持った方と図書館についてディスカッションしているうちに、実は重大なことに気が付きました。何かというと、図書館はブランド力があります。図書館と言うと誰でも何かが分かるので、ブランド力が高いという話をしました。

一方で、図書館とは何かということを考えたときに、みんな知っているのですが、なぜ知っているかというと、その人の経験によるところが大きいのです。その人が経験した図書館というのは当然違うので、それぞれが結ぶ図書館像が少しずつずれているのです。だから、例えば高齢の方と話していて、図書館はよく利用していたという人と話をすると、図書館は暗くて、ちょっとでもしゃべったら「静かにしてください」と怒られるところと思っている人がいる一方で、最近の滞在型の図書館、明るくてガラス張りの図書館を経験している人は、図書館はとても開放的で、お話しする場所もあって、カフェもあるというような像を結んでいる人など、いろいろあるわけです。そもそも図書館とは何か、例えば図書館法という法律自体があることをご存じない方がほとんどでした。ですので、まず図書館とは何かという共通理解をした上でディスカッションしないと、議論がどんどんずれていってしまうことが分かりました。

その一方で私自身も、図書館のことをあまりよくご存じない方に図書館のことをどう説明すればいいのか、かなり悩みました。先ほど協働がキーワードと申し上げましたが、特に他領域の方、あるいは利用者の方と協働する上においては、図書館とは何かということを協働する人たちにきっちり説明できるスキル、能力がこれからますます求められるようになるのではないかと思っています。

一つの特徴としては、認知症にやさしいことの前提として、あらゆる人々が認知症の特徴を理解し接することというのがあります。それと、認知症の人や家族（利用者）と共に図書館プログラムを考え実施すること、そして高齢者や認知症の方が図書館サービスを実施する側に回ること、サービスの提供者側と受け手側の矢印が双方向になることを打ち出したのが、図書館ガイドラインの特徴の一つです。

12. 超高齢社会における図書館の役割

最後に、まとめに入りたいと思います。超高齢社会における図書館、人生 100 年時代を知る、エイジとステージがイコールではないということで、高齢者サービスを考える上でサービス対象そのものを考え直す時期に来ているかもしれません。そして、これらを考えるには協働というキーワードが必要で、誰と協働するのかというと他の図書館です。全国に 3,300 あります。それが連携すればすごいことになると思います。皆さん、全国からいらっしゃっています。ぜひ名刺交換して、ネットワークをますます強固なものにしていっていただければと思います。

また、他部署、他領域、利用者、特にこの利用者の部分は、サービスの受け手と担い手ということで、人間的に考えるのではなくて双方向の部分を今後ますます意識する必要があると思っています。そのことによって新しい図書館の価値創出につながるのではないかと思います。この考え方は新しい考えではなくて、ビジネスの考え方では既に具現化されていて、Customer Relationship Management の領域で出てきます。初めにご紹介した資生堂の高校生が商品開発に携わった例はまさしくそのことでした。特に女性の方は、どうですか。化粧品を交換したり、ガチャガチャから化粧品が出てくるなんて、私だったら絶対考え出せないと思うのですが、ああいった消費者である人たちと協働することで、新しい商品を付け加えています。

これからを考えるに当たってということでお話を閉めようと思いますが、変えてはいけないものと変えてもいいものを改めて考える必要があるのではな

いかと思っています。考える軸として、過去と未来の両方から考える必要があると思います。図書館史は紀元前 3000 年から始まると申し上げましたが、脈々と続いている図書館の役割がある一方で、先ほどお見せした AI アナウンサーはアナウンサーにとって脅威だといわれています。かまないアナウンサー、寝なくてもいいアナウンサー、問題を起こさないアナウンサーであり、人間のアナウンサーにとっては脅威だと思います。

シンギュラリティというものは、人工知能が発達して人間の知性を超えることによって起こる生活上の変化を表した概念といわれています。そして、野村総研からは、人間の労働人口の 49%が人工知能やロボット等で大体可能にという衝撃的な報告書が出ています。幸か不幸かライブラリアンはここに入っていないのですけれども、でも図書館の仕事の中で、代替可能なものと不可能なものが分かれると思います。これは遠い将来ではなくて、10 年後、20 年後に起こるといわれています。ですので、図書館の仕事を考えるときに、AI に置き換わり得るものはそちらに任せておいた方がいいかもしれません。そこに人的リソースを投入するのは、もしかして考え直す必要があるかもしれません。そういう意味でシンギュラリティというもので、初めに AI アナウンサーをご紹介しました。

その他、コアコンピタンスとして、図書館ならではという話をしたと思います。そういった意味で、図書館にしかできないこと、図書館の特徴を考える上でさまざまにドラスティックに図書館のことを考え直す時期に来ているのではないかと思います。AI によってそれだけ仕事が置き換わると、もしかして私たちが地続きでこれから進むと思っている世界が地続きでないかもしれません。

では、どうしたらいいか。ドラスティックに変えるときに、まず必要になるのが失敗の許容だと思います。失敗を許される、あるいは失敗から学べるような環境を醸成することです。そして何よりも、マインドセットの転換です。図書館はこうあるべきだ、図書館は飲食禁止だ、図書館ではお菓子が食べられませんし、図書館では話ができません。あるいは図書館の本が破って返ってきました。どうしたらいいですか。あるいは図書館で個人情報を扱っています。連携するにも、個人情報を外に出せないから連携できません。さまざまな声を聞きますが、そもそも図書館で守らなければならないことは何なのかということを核に置いて、変えられるところは変えていく必要があるのではないか。最後は他領域、利用者との協働を強調しながら、私のお話を終わりたいと思います。長時間にわたり、ご清聴ありがとうございました。

＜事例発表①＞

「『親子で認知症を学ぶ会』について」

福井市立図書館
主幹　岩城　典子　氏

福井市立図書館で児童サービスの担当をしている岩城と申します。児童サービスなのに、今日はこのような高齢社会のテーマのところに来ました。今日は、『親子で認知症を学ぶ会』という取り組みについて紹介します。サブタイトルに「5 年間の取り組みから」と書いてあるのですが、私自身が実際に関わったのは 3 年前からになります。

福井市は 26 万人の人口で図書館が 5 館あり、そのうち三つが比較的大きな図書館で、司書がそろっています。5 年前に始めたときの図書館に私はいませんでしたので、当時担当した職員の記録をもとに今日は発表します。

1. 開催のきっかけ

さて、この取り組みの始まりは平成 26 年でした。市役所の地域包括ケア推進課から、「図書館を会場にして『親子で認知症を学ぶ会』をしませんか」と声掛けをいただきました。5 年前、もし皆さんが図書館にいらっしゃって、こんなふうに声掛けをいただいたらどうでしょうか。すぐに賛同できたでしょうか。

実は当時、すでに科学あそびの会であったり、実験をしたり、もしくは体験したりする行事はたくさん行なわれていました。でも、これらの行事は、そこで新しい発見があったり、好奇心をかき立てられたり、何かをつくることで成果が得られたり、満足が得られたり、そういうわくわくするような行事です。それに対して、認知症というテーマを子ども向けにするということにすごく違和感を感じたのです。私は子どもを対象に認知症のことをするのが、何か社会的な課題を子どもに押しつけるようで、戸惑いがありました。これは、正直にお話ししておきたいと思います。

そして、これをやると決まったときに、ポスター

やチラシなどを図書館に貼ったり配布したりしますが、そのときにも利用者の方から「図書館ってそんなこともするの？」というふうに、ちょっと皮肉めいた言葉をいただいたことも実際ありました。でも、図書館も市役所の一員ですので、やってみようということになって、その当時、今もですが、子どもの支援に力を入れているみどり図書館で初めて行なうことになりました。

始める前に、それぞれの課で役割分担を次のように決めました。市役所の地域包括ケア推進課がポスターの作成や広報をして、工作はほとんどお金がかからない小さなものですが、もし必要な場合には負担してくれることになりました。それから、認知症のお話を地域包括支援センターのキャラバン・メイトの方にお願いしました。キャラバン・メイトとは、認知症サポーター養成講座の講師役です。図書館では会場の提供のほか、もちろん広報も一緒にしましたし、関連本の紹介、それから工作の企画や進行を担当しました。ここに載っているポスターは図書館が作ったものですが、図書館がポスターを作ることもありました。

2. 学ぶ会を実施して分かったこと

さて、チャレンジの 1 年目です。キャラバン・メイトの方が手作りの紙芝居をしたり、記憶力テストをしました。図書館では、おじいちゃん、おばあちゃんが出てくる絵本の読み聞かせと、ロバ隊長のキーホルダー作りをしました。ロバ隊長というのは、このオレンジ色のロバのことなのですが、認知症サポーターキャラバンのマスコットです。ロバはゆっく

り歩きますから、安心して暮らせるまちづくりの道を一歩一歩進んでいくようにという意味が込められているそうです。

そして、事前予約なしで、いきなりその当日をどきどきしながら迎えたわけですが、何と親子45名の参加がありました。通常の読み聞かせ会は大体10～15人なのに対し、3倍の集客があったのです。私たち自身とても驚いたのですが、人数だけでいうと大成功です。45名の方が参加してくださったのはうれしいのですが、中身はどうだったのだろうと考えたときに、「工作が楽しかった」というだけで終わっていないかという反省が残りました。

手作り紙芝居をキャラバン・メイトがしていたのですが、認知症を超えて、看取りのところまで書いていたのです。ちょっと内容が深刻でした。どちらかというと子ども向けというよりは、紙芝居の形はしているけれども大人向けの内容だったのです。図書館としてはあまりにも重々しい会になってはいけないと思って、逆に読み聞かせを明るい雰囲気のユーモアのある絵本を選んでいたのです。でも、優しいおばあちゃんが出てきたり、頼もしいおじいちゃんが出てきたりするような本を読んで、認知症が理解できたかというと決してそうではありません。認知症という言葉を初めて聞くような子たちが参加する会で、これではやはり「認知症の会」とはいえないということになり、今度行うときはもっと内容を具体的にしようと話し合いました。

次に、具体化を図った2年目です。まず、1回目よりも対象年齢を少し上げました。この行事は夏によく行なっていて、夏休みの定例行事になりつつありますが、自由研究にもなるような、ちょっと高学年にも来てほしいという感じで進めることにしました。紙芝居はやめて、「劇団たからぶね」による寸劇や疑似体験、脳に関するお話はキャラバン・メイトが担当しました。図書館は、認知症が出てくる絵本の読み聞かせ、関連本のブックリストの作成・配布、それから一般書の特設コーナーを設置しました。親子の行事なので、子どもだけにとどまらず、親世代へのアピールも忘れませんでした。内容を見直したことによって参加者数は減りましたが、内容はぐっと充実した会になりました。

そして、手応えのあった2年目を経て、3年目からは市立・みどり・桜木という大きな図書館全部でやろうということになり、三つの図書館で行うようになりました。地域包括支援センターは地区ごとに決まっています。各図書館に一番近い地域包括支援センターの方と打ち合わせをして、どういう内容にするか、どういうものを作るかということを話し合って、各館で行っていくことになりました。内容は資料の15ページのとおりです。少しずつ内容は違うので、平成28年は市立図書館の会に参加したけれども、平成29年はみどり図書館の会に参加するというリピーターの親子も実際に出てきました。

ここからは、実際の様子を写真で見ながら紹介していきたいと思います。左上（の写真）は、劇団たからぶねの寸劇のシーンです。劇団というと何かプロみたいな感じがするのですが、全然プロ集団ではありません。小規模多機能事業所の方やデイサービスで働く職員さんたちが、ボランティアでやっている劇団です。在宅介護の実践者だからこそできることがあるというふうに、自分たちが仕事から得た経験を生かして寸劇をしたり、講座でお話をしてくださったりしました。大体10名いらっしゃるそうですが、お仕事が休みの人が集まって5～6名の方がいつも来てくださっています。ちょうどここは劇の終盤シーンで、垂れ幕のようなものを持っているのですが、言葉は見えますでしょうか。ここに書いてあるのは、認知症の方への対応の心得である三つの「ない」が書かれています。一つ目は「おどろかさない」。後ろから急に話し掛けたり、たくさんの人が一度に1人に対して話し掛けるようなことをしない。二つ目は「いそがせない」。穏やかな口調で、ゆとりを持って、余裕を持って対応する。三つ目は「自尊心を傷つけない」。できないことや失敗したことを責めないということです。この三つの順番をちょっと入れ替えて、「おどろかさない」、「自尊心を傷つけない」、「いそがせない」というふうに並んでいるのですが、この頭文字を取ると何になりますか。「おじい」となります。「おじい、絶対みんな忘れないよね」と言って、どういうふうに対応したらいいかという内容を教え

てくださいました。「おじい」と思えば、もう絶対に忘れませんよね。

右下の方は、レジに並んでいっぱい買い込もうとしていて、さらにはお金が財布から上手に出せないようなシーンを演じていました。

それから、疑似体験です。男の子たちがヘッドホンをしたり、ゴーグルを着けたりしています。ゴーグルを着けることによって見えにくい、ヘッドホンを着けることによって聞こえにくい、さらにはみどり図書館などでは、重りの付いたベストに肘あてと膝あての両方を着けて歩いたらものすごく歩きにくいということや、グローブをはめてお金を取り出そうとすると取り出せないということを、身をもって体験します。そうすることで、お年寄りの体を理解することにつなげていました。

それから右下は、男の子たちが紙のボールを持っているのですが、これは脳に見立てた箱に子どもたちがボールを投げ入れます。ボールは何を意味しているかというと、新しい情報を意味しています。若い人の脳とお年寄りの脳で箱の形を変えて、ボールを入れてみるのです。お年寄りの脳の箱は少し障害をつくることでボールが入れにくい。つまり、情報がキャッチしにくいということを体感してもらいました。

それから、次は記憶力テストです。大体10種類のものを下から出して、机の上に並べていきます。全部出した後、いったん片付けます。大体これは、会の最初にするのです。そして、そこから認知症の話が20分ぐらい続きます。その後に、「さっき、物を並べたよね。あれを出した順番にみんな言えるかな」と言うと、大体子どもは覚えています。親の方が怪しいということになってくるのですが、そういう記憶力テストです。

あと、今年はこんなものもあったのです。「今日、この会場に入ってくる前にみんなアイス食べたよね。すごくおいしかったね」と言います。でも、それを聞いた子どもたちは「もらってない」「食べてない」「全く記憶にない」とまず思います。もしくは「みんなはもらったのかもしれないけど、自分は食べていない。私だけもらえなかったのだろうか」という被害妄想に近いような、「私だけ？」という気持ちになります。本当はアイスを配っていないのですが、「みんな、ドキッとしたよね」と言います。その気持ちが、本当に認知症にかかった人が思うのと同じように全く記憶になかったり、私だけなのではないかと思ったりする気持ちと同じことですよということを話していました。

それから、これがキャラバン・メイトの方が一番伝えたいと言っていることなのですが、認知症は脳の病気であるということです。左側では紙芝居のようなパネルを使って、脳の仕組みを分かりやすく教えてくださいました。最初はイソギンチャクのような手で情報を上手にキャッチしていたのが、だんだんその手がうまくキャッチできなくなって、さらには進行すると、覚えていたことが脳の中からあふれて忘れていってしまうということを説明していました。

それから、もう一つ伝えたいことがあります。怒られたりしたら、悲しい気持ちになるということです。「みんな、宿題をしていなかったり、忘れ物をしたときにお父さん、お母さんに怒られたら嫌な気持ち、悲しい気持ちになるよね。それは認知症で忘れた人も同じで、怒られたりしたら嫌な気持ち、悲しい気持ちになるのだよ」と伝えると、子どももすごく納得しているようでした。

右上は拍子木を持っています。拍子木を打って、「これと同じようにみんな手拍子ができるかな」と言ったり、右下は指の体操です。両方の手で、最初は同じように指を折っていきますが、次は1本ずらして折っていくと、最後に1個ずれていないといけないですよね。1本ができたら、「次は2本折ってできるかな」、「3本折ってできるかな」というふうに指の体操もしていました。

次が私たち図書館の出番です。認知症について書かれた一般書はたくさん出ていますが、児童書でも取り扱っている絵本や物語がたくさんあります。その中から今日は5冊持ってきました。これらの本は、絶対に普通の読み聞かせ会では読まれない本ばかりです。こういうテーマがある会だからこそ、その場に必要な本を持ってきて、見てもらって、この本の

読者を見つける絶好のチャンスだと思っています。

1冊目は絵本で、『ラブリーオールドライオン』です。ライオンの王様が出てくるのですが、だんだんおじいちゃんになって忘れん坊になって元気がなくなっていくのです。孫のレニーの名前も忘れてしまうのですが、昔のことを話したら覚えていて、だんだん元気を取り戻していきます。おじいちゃんになったので、震える手で王冠を孫のレニーの頭の上にかぶせながら、「次はおまえの番だよ」と言うシーンがあります。それは王様のことを言っているのだと思いますが、その次のページに、王様になったレニーがおじいちゃんになったとき、レニーもまた忘れん坊になったという最後になっています。「いつかは君の番」ということで、認知症に絶対になるわけではないですが、誰しもなるし、子どものあなたも大人になっておじいちゃんになっていくというメッセージが上手に伝わる本だと思っています。

2冊目は『ばあばは、だいじょうぶ』という本です。この本は課題図書にもなりましたので、見たことがあるという方もいらっしゃるかもしれません。一緒に暮らしている大好きなおばあちゃんが、おかしなことをしだすのです。お茶を出すときに「お茶だよ」と言って、庭で拾ってきた枯れ葉が急須の中に入っていたりします。「僕」はおばあちゃんのことが大好きです。でも、大好きだからこそ、おかしくなっていくおばあちゃんを見たくないのです。それで、ママに「おばあちゃんに優しくしてね」と言われても、学校から帰ったらおばあちゃんの部屋に寄らずに自分の部屋に駆け込んでしまいます。そのあたりの子どもの気持ちがすごく同感できるというか、そういうところがあります。その後、おばあちゃんは、自分が忘れないようにいろいろなメモを引き出しや箪笥の中に隠しているシーンがあるのですが、そこも読んでいてすごく泣きそうになります。

3冊目は、『忘れても好きだよおばあちゃん！』です。この本はちょっと字が細かいので、全文読み聞かせをすることはないのですが、おばあちゃんの「人生の木」というのを描く場面があります。おばあちゃんの生活の中で、一番下の方が生まれた頃、子どもの頃で、それから結婚して孫が生まれて、今が一番てっぺんに来ます。これがおばあちゃんの人生の木だとすると、おばあちゃんの人生の木に秋が来て、風が吹いて木の葉が散るように、この思い出が散っていくことになります。でも、そのとき、上の方から散っていき、生まれた頃、小さい頃の根元の方の思い出はなかなか散りません。認知症の記憶の部分が上手に分かるようになっているので、この場面は紹介しています。

4冊目は、『おばあちゃん、わたしをだいて』という本です。これは物語です。パパとママはお仕事に行っていてあまりおうちにいません。それで、おばあちゃんのことをよく見ていたのは、孫のエレンという女の子です。おばあちゃんが何枚も服を着たり、クッキーを焼くのが上手だったのに手順が分からなくなって上手に焼けなくなったりします。エレンは一緒にいる時間がすごく長かったので、それに気付いていきます。最終的にはお母さんが病院に相談することになるのですが、お母さんが「エレン、あなたの話してくれたことがおばあちゃんの薬を決めるのに役に立ったわ」と言って、普段の様子をエレンが教えてくれたことによって、おばあちゃんはアルツハイマー病だったことが分かったという物語になっています。最初に気が付くのは子どもかもしれないということで、この本を紹介しています。

最後は、『おばあちゃん、おじいちゃんを知る本』というシリーズの2巻目で、『どうしてすぐに忘れちゃうの？』というサブタイトルが付いた本です。認知症を取り扱っていて、こんなときはこうしようということので、いつもと違うことをしたときにどんな声掛けをしたらいいかという対応の仕方が載っています。下の写真で、一生懸命本を開いている子がいますが、講座が終わってこの子が一番最初に開いたのは、この本のこのページでした。いつも付箋を貼ったりして、見てほしいところにちょっと印を付けたりしているのですが、この本を真っ先に見た子がいました。

子どもは本当に真剣に聞くのです。読んでいる私もぐっとくるのですが、その真剣なまなざしを見ていたら、子どもなりに理解しているのだなということが本当に実感できます。最初は、5年前に「そんな

ことをするの？」と利用者が言われたように、私もちょっと気が重かったのですが、やってみたらそんな気持ちはいっぺんに吹っ飛びました。小学生でも十分に、その子なりに理解していることが分かりました。

それから、ブックリストは必ず作ってお渡しするようにしています。後からもしかしたらじわじわと思い出すことがあるかもしれません。そのときに、どんな本だったかがすぐに分かるようにブックリストを作っています。実際、会が終わって1週間後にまた来館して、リストを持ってきて「ここに載っている本を借りたい」と言って借りてくれた親子もいました。

それから、工作です。工作がしたくてこの会に参加する子がたくさんいます。でも、決して工作は客寄せパンダでは終わっていません。うちわやキーホルダー、資料17ページの一番下の写真はガーランドを作ってみんなで広げているシーンです。日常で使うもの、身に着けるもの、見えるところに置くものを必ず作ります。そこには必ずこのロバ隊長を貼ります。この日に学んだ認知症のことを忘れないためです。

それから、コップ袋とペン立ても作っています。コップ袋は、小学生は毎日学校に持っていくものです。自分で作ると、「これ、自分で作ったんだ」と誇らしい気持ちになると思いますが、「何、このロバは？」という話になって、もしかしたら友達にこの日学んだことを話すことによって、また認知症のことを知る友達ができるかもしれません。そのように、楽しい時間を親子で共有し、学んだことを共有するという意味が工作に込められているので、工作もとても大切な時間と捉えています。

そして特設コーナーは、この日行事に参加しなかった方、図書館に来館してくださる他の利用者の方にもこのことを届けたいので、必ず設けています。たくさんの方に知ってもらうチャンスになります。大人向けの認知症サポーター養成講座もしていますし、この行事がきっかけで、逆にまた依頼をいただいて、出前図書館といってイベント会場などに行って認知症関連の本を読んだり、新しく地域包括支援センターがオープンするときにオープニングセレモニーに本を持っていって紹介したりする機会も増えました。

5年間を通した参加者をまとめると、資料18ページのようになります。1年目が45人というずば抜けた数字で、その後は実際に少ないときもあります。でも、ちょうど私たちが3館一気に始めるようになった平成28年は、キャラバン・メイトの活動がものすごく活発になってきて、小学4年生の福祉の授業に入っていったり、夏休みには児童館や児童クラブや他のところでもたくさん開催するようになったので、時を同じくして広がった時期でもありました。でも、人数が少ないからどうこうというのではなく、連携している私たちはみんな継続していくことが大切だと思っているので、人数が少なかったということはあまり気にしないようにしています。

3. 学ぶ会を通して伝えたいこと

ここからは、三つの立場から伝えたいことをおさらいしてまとめていきたいと思います。

最初は、地域包括支援センターのキャラバン・メイトの方です。認知症は脳の病気であること、誰でもかかる可能性があること、記憶は忘れても気持ちは忘れないことという三つは伝えたいと言っています。認知症のことを知ることによって、対応できることや気を付けてあげられることがあります。もし認知症を知らなかったら、大声をあげている高齢者を見たときなどに、やはり怖いと思うでしょう。もしくは、何かおかしかったりしたときに、変な目でじろじろ見たりします。でも、認知症を知ることによって、そういうことが取り除かれて、偏見のない社会につながっていくのではないかと言っています。

次は、市役所の地域包括ケア推進課です。親子を対象とする効果についてこのように言っていました。「子どもに認知症のことを教えてくださいね」とお父さんやお母さんにもし言ったとしても、どう説明すればいいのか分からないと思う親がたくさんいると思うのです。だけど、講座を通して、こういうふうに伝えたらいいのかということが分かります。それから、エレンの物語のところでもありましたが、福

井は共働きがとても多くて、三世代同居の家庭もたくさんあります。もしかしたら、第一発見者は子どもかもしれません。子どもから大人に伝えるときもあるかもしれないということで、親子を対象にしています。それから、親世代というと大体30～40代になると思うのですが、若年性認知症の方がもし職場にいたときに、こういう講座を受けていたらはっと気が付くことができます。そういう意味でも親子です。それから、「小学生には早いのではないか」という声もあるかもしれないのですが、小学生は小学生なりに理解して、中学生になったらまたキャリア教育などで理解して、それから大人になったらまた理解してという、理解が幅広く深まっていきます。そのように継続することが地域の力につながっていくのではないかと考えています。

福井県は人口に占める割合では、認知症サポーター数は全国2位、福井市は県庁所在地の中で認知症サポーター登録率が1位です。

最後は、私たち図書館だからできることです。大体参加してくださった親の皆さんは、「絵本がすごく良かった」と言ってくださるのです。キャラバン・メイトのお話も悪くはないのですが、そこで半分ぐらい理解していたところを、さらに絵本で多分、心の体験をするのでしょう。さらにぐっと深まることで、「絵本が良かった」と言ってくださる方が多いです。

それから、これは事業所の方がよく言っている言葉ですが、「こんなに認知症の本があるなんて知らなかった」と言ってくださいます。たくさん本があって、普通に並んでいたら埋もれていて分からないような本との出会いです。ぎゅっとテーマに寄せて固めることによって、読者に届けることができます。

それから、緩やかな啓発です。児童書というのは、先ほどの絵本もそうなのですが、押しつけがましくなく大切なことを教えてくれます。ついつい道徳的になりがちです。でも、そこを上手に伝えてくれるので、緩やかな啓発という言葉を使いました。ちょっと話はずれますが、10、11月は学校からブックトークの依頼があってブックトークをすることがたくさんあるのですが、なぜか今年は「人権をテーマにしてください」という学校がすごく増えました。「人権をテーマに1～2年生に何をするの？」と思うのですが、そこは絵本の力を借りてうまく乗り切りました。それも緩やかな啓発の一つだと思っています。

それから、「親子で学ぶ認知症の会」は、たくさんのメディアに取り上げられました。地元の新聞やニュースで取り上げられることによって、そこにいる親子だけでなく、映像や新聞を見た人にも、こういうことをしているのだということを届けることができました。

それから、これは図書館のメリットですが、職員も認知症について理解することができます。認知症の症状は、先ほども呑海先生が言ってくださったように、物忘れだけではなく、興奮することもあります。そういうことについて職員が対応できる力を持つことができます。そして、図書館というのはどんな方でも来られる場所なのだというアピールができます。これも話がちょっとずれますが、「ろうの会」をしたことがあります。手話をするのです。これは子ども向けにやったのですが、実際には、子どもよりギャラリーの大人の方が多かったのです。実際にろうの方も来てくださいましたし、どんな方でも来ていいのですよというアピールにもなります。

そして、大事な社会的課題を考える場になっていきます。子どもたちが自ら考えて協力していけます。そういう市民を育てるのは、教育機関の図書館としての使命でもあると思っています。もしその効果を表せと言われたら、参加者の数値しか言うことはありませんが、本当の効果は、学び終えた子どもたちが大人になったときこそ表れると思っています。今すぐ分からない効果は絶対にあると思っています。

このようにして少しずつ形を変えながら、充実した会になった「親子で認知症を学ぶ会」なのですが、連携することによって各機関が信頼を深めて、いつでも相談できる心強い関係に変わっています。劇団たからぶねの方は次のように言っています。「介護が必要になると生活は一変し、今まで暮らしてきたまちや職場・自宅での生活がしづらくなります。事業所とまちがつながりながら、介護が必要になっても、認知症になっても続けられる地域生活を目指している」。専門機関や市役所はなかなか足が運びづらいと

ころですが、図書館は地域住民の誰が来てもいいし、交流する場所です。この点は、図書館が入る意味がとてもあるのではないかと思っています。一つのグループでは成し得なかったことを、連携することによって可能にしています。図書館では直接、交流支援のサービス、音読の会や朗読やいきいき体操、詐欺に遭わないための講座もしていますが、それに加えて高齢者への理解を深めるサービスとして、今日はこの『親子で認知症を学ぶ会』を紹介しました。

『いきいき情報ふくい』というのは、福井市の広報課が作成した番組です。2015 年と 2016 年なので古いのですが、もしご興味がありましたらネットでご覧ください。ご清聴ありがとうございました。

＜事例発表②＞

「図書館と多世代の市民との協創から生まれるもの」

つづき図書館ファン倶楽部
江幡　千代子　氏

こんにちは。横浜から参りました、つづき図書館ファン倶楽部の江幡千代子と申します。今回のご依頼は、つづき図書館ファン倶楽部にありました。ファン倶楽部の中で誰が行ったらいいかということで話し合って、最初からいろいろ関わっている私がいいだろうということで今日は参りました。しかし、こういうところでお話をするのは初めてなので、本当に不慣れです。でも、高齢者が図書館の周りでどんなに楽しく生き生きと活動しているかという話を今日はしたいと思います。

パワーポイントで写真をお見せするために、会の代表の若杉が 3 日ほど前に、不慣れなパワポを作りました。写真しか出てこないパワポなのですが。それを操作するのは私にはちょっとできないので、今日は娘に押すだけということで来てもらっています。そんな私ですが、どうぞ最後まで聞いてください。

1. 横浜市の図書館の現状

私が参加しているつづき図書館ファン倶楽部は、会員 20 数人の小さな市民グループです。年代は 30～70 代で、バランスは取れていますが、18 年前の発足当時は 40～50 代でした。今はそれが 50～70 代になっているので高齢化しています。

まず、私が住んでいる横浜市の図書館の現状を簡単にお話しします。レジュメにも数字で書いていますが、横浜市には地下 3 階、地上 6 階の大きな中央図書館があります。それ以外には各区に 1 館、地域の図書館が合わせて 17 館あります。図書館が各区に 1 館が整ったのは 1995 年でした。急速な人口増加で、学校建設にすごく予算が必要だったという事情があるそうですが、1995 年以来、1 館も建設されていません。スライドにあるマップは図書館員が、都筑区の中で図書館は 1 館だけど、本がある場所はこんなにあるというのをイラストで描いたものです。

都筑区は、横浜北部の港北ニュータウンの計画の中で誕生した新しいまちで、現在人口 21 万 1 千人です。平均年齢は何と 41.75 歳で、市内でも一番若い人口構成です。図書館の開設は、平成 7 年都筑区総合庁舎の 1 階の一部にあります。面積は 2396.42㎡、座れる椅子の数が 76 席です。職員数は 10 名で、受付業務は委託業務になっています。去年の年間貸し出し冊数は 100 万 7411 冊です。1 日の貸し出し人数は約 1000 人で、貸し出し冊数は約 3000 冊です。中央図書館よりも貸し出し冊数が多いのです。横浜の北部は読書人口が多いけれども図書館が少ないといえます。土日の混雑はすさまじいものがあります。

2. 協働の家系図

私たちには「家系図」があります。親・子・孫 3 代の家系図です。由緒正しい「協働の家系図」です。この家系図の中に全ての活動が書き込まれています。まず、親世代の「つづき図書館ファン倶楽部」の説明と、そこから生まれた「つづきっこ読書応援団（TDO＝つどおう）」の活動、それから「つどおう」からさらに生まれた、今日の本題である「つどおう JiJi・BaBa 隊」の活動についてお話しします。

つづき図書館ファン倶楽部の誕生は、2000 年の都筑図書館開設 5 周年記念事業にさかのぼります。当時の図書館長の呼び掛けで集まった公募のサポーターは、開設 5 年目の若い図書館に区民がどんな要望を持っているか、要望を進めるためにはどんなアイデアがあるかなどをアンケートで聞いたり、区役所の課長も加わったシンポジウムを開いたり、記念講

演会もしたりしました。記念事業が終わった後の高揚感の中で有志が集まって図書館を応援していくことになり、3 年の準備会を経て、2003 年に正式につづき図書館ファン倶楽部が誕生しました。会の名称を平仮名で「つづき図書館」としたのは、固有名詞の都筑図書館の応援だけでなく、地域全体の図書館や読書環境を良くするための活動をしていこうという考えからです。

協働事業でスタートしたので、「生まれも育ちも『協働』です」がキーワードです。都筑図書館とは発足以来、毎月集まって話し合う協働のテーブルがあります。会の代表が、この会のことについて述べたものがあります。『図書館雑誌』2018 年 8 月号に載せていた文章をそのまま述べます。

「私たちの活動は、図書館を応援するボランティア活動ですが、基本的には下請けはしないというスタンスを取っています。協働のエンジンは相互の協力と提案、ウィンウィンの関係づくりを目指しています。図書館との議論では、時にもどかしく感じたり緊張関係になることもありますが、それも含めて協働だと思っています。図書館は元々、資料を共有してシェアする場です。数ある公共施設の中で、図書館は市民と協働するのがよりマッチすると考えています。

会のスタンスとしてもう一つ、「無理なく楽しく」についても触れます。無理のない楽しさの幅はメンバーそれぞれで、関心や時間と相談しながら活動に参加します。そうはいっても、図書館と協働する場面ではおのずと決め事やルールが必要になります。それを調整する TMEK（都筑図書館から未来を描く協働の会）というプラットフォームがあります。図書館と協働担当職員との日常的なコミュニケーションが出来上がってきます。これまでの都筑図書館とファン倶楽部だけの協働関係を、2012 年からは TMEK を通して区内の図書館に関連する団体にも呼び掛けて輪を広げた活動になっています。さらに、協働から共創の図書館づくりへと夢見ています」。ここまでは、若杉隆志の記録です。

私は、発足当初から「通信」を担当してきました。今日もその一部が中に入っています。お手元の 49 号からは、若い 20 代のメンバーにバトンタッチしていますが、17 年間作り続けてきました。通信の内容も、行政との協働を意識して図書館や区役所などの方に巻頭言をお願いしています。林市長に登場していただいたこともありました。また、図書館行事の紹介や司書のお薦めの本のコーナーも定番になっています。司書の連載コーナーがとても人気で、『子どもと本』という小冊子にして出版したこともありました。現在は 2,000 部発行しています。

最近号では、文化施設用地として確保されていた市有地が長い間眠っていたのですが、やっと動き出すらしい。もしかしたらそこに図書館ができたらなあという妄想編が 45 号、脱妄想編が 46 号、そして 47 号は「人とまちをつなぐ未来の図書館を考える講座」を開いて、最後にワークショップを行って、みんなで理想の図書館像を描きました。そのイメージのイラストを掲載しています。この通信の中では素晴らしい図書館が出来上がったのですが、現実は図書館が盛り込まれることもなく計画が進んでいます。1.2ha というとても広くて駅に近い土地ですが、もう民間に売り渡されることが決まってしまいました。妄想は妄想に終わってしまいました。

3. つづき図書館ファン倶楽部の活動

ファン倶楽部の主な活動を二つ紹介します。横浜の学校図書館の画期的な変革があったときに、私たちつづき図書館ファン倶楽部も大きく関わっています。横浜の小中学校の図書館には、司書がゼロでした。つづき図書館ファン倶楽部も、発足当時の代表が長い間学校図書館問題に取り組んできたこともあって、彼女が中心になって市長ミーティングで司書の配置を訴えたり、横浜市の東西南北 4 方面で大集会を開いたり、全市的に盛り上げるようにしました。各党派の議員もその大集会に参加して、その機会にちゃんと学習し、議会でそれぞれ競争して必要だと訴えてくれました。それで学校司書配置が決まりました。

2013 年 10 月から配置が始まり、4 年間で全小中学校 500 校に専任の司書が配置されることになりました。学校図書館が活気のある場になって随分変化が

起きています。図書館の利用方法を学んだ子どもたちが社会人になったとき、図書館を活用した生き方が自然と身に付いて、そのときは図書館も変化していくのだろうか、それまで待たないといけないのかなということもあって、子どもたちの成長が待たれます。

2016 年には、都筑図書館が市民と協働する活動をしているということで文部科学大臣賞を受賞することになりました。私たちは、これはチャンスと「ブラボー！都筑図書館とじぶんたち！！」というパーティーを開きました。区の選出の市や県の議員さんが全員見えました。校長先生たちも、おはなし会グループの人たちも集まりました。100 人以上が集まりました。

（写真）ご覧のとおりで、これはつづき図書館ファン倶楽部のメンバーを紹介しているところです。にぎやかな中にも、詩の朗読をしたり、群読をしたりとなかなか格調も高い内容でした。最後の記念撮影には、参加した議員さんがみなさん残っていました。大抵、議員さんは最初のところであいさつをして帰ってしまうのですが。このブラボーパーティーが楽しかったかが伝わったと思います。図書館行政を変えていくには議員さん達に頑張ってほしいです。ある議員さんから「図書館のイメージがずいぶん明るい見方に変わったよ」と言われて、「やった！」と思いました。

前後しますが、活動が大きく転換したのは 2010 年でした。都筑区役所の「つづき力発揮講座」を受託して、全 5 回の連続講座で「つづきっこの読書環境を良くする応援団になろう」を開催しました。講座の内容は、平塚市で子どもと本をつなぐ活動をしている諸山朝子さん、「子どもと本」代表の金澤和子さん、親子読書地域文庫全国連絡会代表の広瀬恒子さんをお迎えして、子どもにとっての読書の大切さと、そのためには大人たちに何ができるかを考える機会をつくりました。2011 年 2 月、講座の受講生の有志によって「つづきっこ読書応援団」、頭文字を取って「TDO＝つどおう」が誕生しました。

先ほどの家系図に戻りますが、親の代の次の TDO の時代には、三つの部会が誕生しました。TDO のメンバーは必ずどこかに所属しています。学校部会・勉強部会・企画部会があります。学校部会は、学校ボランティアをしている人たちが一堂に会して交流会を開く機会を年 1 回開催しています。それから、不要になった児童書や絵本を区内の人たちに呼び掛けて集め、学校図書館にそれを配るリユース図書活動もしています。勉強部会は、メンバーのスキルアップの企画が中心です。わらべうたの勉強会や、絵本勉強会「マドレーヌ」は、今は瀬田貞二さんの絵本論を毎月勉強しています。企画部会は、地域団体が主催する事業に、本と子どもと読書をキーワードにして TDO の参加の場を広げる、ネットワークを広げる、いわば営業マンのような部です。この部の代表は私が務めています。この部の活動の中から「JiJi・BaBa 隊」が誕生したので、この活動を少し詳しくお話します。

都筑区には、2011 年の東北の未曾有の震災の後、被災地をずっと応援し続けていこうと NPO 法人を立ち上げた、「結ぶ」というグループがあります。「結ぶ」が主催の毎年 3 月に行う「わすれない 3・11 復興支援ひろば」に TDO も参加しています。駅前の芝生広場では、被災者の皆さんが物販をしたりして交流します。都筑区からも、市民が模擬店やステージのパフォーマンスをしながら支援の気持ちを届けています。私たち TDO も募金箱を置いて支援金を募って、集まったお金は被災地の図書館が復興するようにしています。今年は女川つながる図書館に約 2 万円を送ることができました。

2012 年以来続けている私たちのイベントは、「段ボール迷路」、「あおぞら図書館」です。神戸の震災のときには、崩れた家の隙間に閉じ込められた子どもたちが多くいたそうです。段ボール迷路は「狭くて暗くても怖がらないで」というパニックに負けない経験を学ぶ遊びであると教えてもらって、その意味も伝えながら作っています。迷路でぐるりと大きな輪を作った中に広い空間ができるので、そこにも段ボールを敷いた広いお座敷を作り、図書館から借りた本をたくさん並べて「あおぞら図書館」を開きます。長い迷路から出てきてほっとする子どもたちに「お話を読んであげるよ」と誘ったり、親子や子ど

もたちが絵本を目当てに靴を脱いで入ってきます。そして、絵本に読みふけります。私たちも子どもに1対1で絵本を読んであげたりしています。これはなかなか新鮮な体験でした。この催しに図書館の司書が休暇を取って参加してくれました。この体験をしてくれたことが、後に都筑図書館での「絵本を読んであげますよ～」という事業になるきっかけになりました。

企画部のもう一つの催しとして、「子育て地蔵まつり」の参加があります。子どもたちの健やかな成長を願うという共通テーマで、区内のいろいろな企業やグループが川辺に集まって毎年開催されるイベントです。TDOも紙芝居やわらべうたを展開します。わらべうたの輪にも、人を誘う秘策があって、みんなにお手玉を1個ずつ渡してしまうのです。そして、「もーもたろさん・・」などと歌いながら、次々に渡すようなことをしているうちに、いつの間にか丸い円が出来上がります。もし良かったら、わらべうたで大勢の人をを巻き込む際、この方法をお試しください。

4. つどおうJiJi・BaBa隊

2012年、北山田地区センターに提案して、講座が実現しました。日頃から孫が生まれると、絵本をプレゼントしたり読んであげたりして、絵本が身近になると私も感じていました。子どものもとに呼び寄せられて、田舎から都筑にやって来て、居場所を探している高齢者が増えてきています。そこで、高齢者対象の絵本講座「JiJi・BaBa絵本塾」を提案しました。漢字の爺・婆ではなく、JiJi・BaBaです。最近は略して「私たちＪＢよ」と言っています。ネーミングは大事です。それ次第で、私たちの気分は随分変わります。漢字の「爺・婆隊」だと、なんだかかなり元気をなくします。

チラシには「そろそろ小さな文字が見えにくくなっているご同輩、子どもの好きな絵本をのぞいてみませんか。これはびっくりの、面白い、味わい深いがぎゅっと詰まっている。それに絵本を読むJiJi・BaBaは孫たちにも大モテ。娘や息子もおやっと見直すこと請け合い。さあ、老後の楽しみ大発見の絵本塾にどうぞ」と載せました。地区センターから全面的に任せられて、TDOのメンバーが講師陣になって全3回の講座を開催し、とても盛況でした。お茶を飲みながらの3回目の講座では参加者に、自分の孫だけでなく、孫たちへの活動をしませんかと提案しました。そして「つどおうJiJi・BaBa隊」が10月20日に発足しました。

JiJi・BaBa隊の入会資格は50歳以上で、かなり緩やかです。現在約30名のメンバーがいます。BaBa率がやはり高いですが、JiJiも4人います。出席率はその4分の1、ほぼ1名が出席で他の3名がちょっとサボりがちなのが寂しいです。定例会が、会の要です。月に3カ所、定例になっているおはなし会に出向いていくので、会の代表が手配師のようにホワイトボードに、あなたは今月どこ、来月はどこというふうに書きながら担当を決めていきます。それぞれおはなし会の性質が違います。ちょっと頑張らなければならないハードなおはなし会、あまり頑張らなくてもいいおはなし会、全く頑張らなくてもいいおはなし会の3種類のおはなし会を開いています。私たちの活動としてはそれぞれ大事な活動です。

ていねいに取り組むおはなし会は、JiJi・BaBa隊が誕生した地区センターでのおはなし会です。子どものプレイルームに30分間お邪魔しておはなし会をします。JiJi・BaBa隊の20名ぐらいが、3班に分かれてそれぞれ3カ月に1回ずつ、このおはなし会に臨みます。プログラムも丁寧に立てて、練習もして行きます。オープニングの歌まであります。出欠カードを作ったり、小さなプログラムも毎回、皆さんに手渡すためのものを作っていきます。参加する親子はだいたい15組ぐらいで、リピーター率は半分ぐらいです。新しい人が入ってきたりする率も高いです。

「ここぽっぽ」というのが、あまり頑張らなくていいおはなし会です。一時保育の施設「ぽっぽ」という場所を開放しているところで「ここぽっぽ」というおはなし会を、「ぽっぽ」の主催者が開いています。そこに私たちも、他のグループの人も一緒に参加しています。JiJi・BaBa隊から2～3人参加しますが、好きな絵本を持っていくぐらいで、その場の雰囲気

で出すものを決めていきます。でも、集まっている子どもたちは結構たくさんいて、この場所がみんなから支持されていることもあって参加率が高く、しかも話を聞くのがとても上手で、私たちも毎回すごく楽しみです。

そして、今日の本題である、都筑図書館での「読んであげますよ～」というおはなし会。このお話をしたくて今回参りました。都筑図書館の児童書コーナーで「読んであげますよ～」をやっています。これは前述の「あおぞら図書館」がヒントになっています。子どもの本のコーナーで「読んであげるよ～」と言って、持ってきた本を1対1で読んであげるのです。1 対 1 ですから、自分の孫に読み聞かせをするぐらいの感じです。大して練習もしていないから上手に読めないのですが、そこは絵本の力がすごいと思います。本当にどんぴしゃり、読む方も聞く方も面白い本に出会うととても楽しくて、初めての子どもとの出会いなのに、読み終わったときにハイタッチしたくなります。いつもではないのですが、「よかったね。面白かったね」というような出会いがあるので、とてもドキドキするような場です。読み手としてもすごく刺激的です。1時間半読むのですが、読み終わった後に私たちは必ず感想を出し合って、それも記録していきます。大抵みんな、「面白かった」、「この親子がこんな話をしていたよ」など、そのときの話がすごく盛り上がって、本当に面白い感想になります。これを皆さんの図書館でもぜひやっていただきたいです。

これは、私たち高齢者にとっても素晴らしい場なのです。JiJi・BaBa 隊に参加はしないけれども、この図書館での「『読んであげますよ～』だけに関わりたいわ」と言って、毎回参加している友人がいます。彼女は結婚していなくて、子どももいないのです。でも、抱っこをしたり、肩を寄せ合って読んであげていたりするときは本当に気持ちが柔らかくなって、「こんなに幸せな気持ちになったのは、もしかしたら今までの一生で初めてかもしれない」と言います。そういう感想は本当にみんな持てると思います。多分これは絵本の力なのだろうと思います。

私たちもそれで気が付いたのですが、絵本には高齢者の願いというか、祈りがあります。これから育っていく子どもたちに「元気になってね」、「笑ってね」、「友達いっぱい持ってね」、「ママとけんかしても大丈夫。応援しているばばもいるよ」という願いがどの絵本にもあると思います。絵本作家の人たちは、やはりそれを意識していると思います。子どもが読む本だからです。出版社もそれを意識して出版しています。その絵本の価値を改めて感じる場です。

何の見返りも望まない赤の他人の私たちが無償の愛情を自分たちに注いでくれたのだなというのも、子どものどこかにちょっと宿るのではないかということをちょっと期待します。それから、私たちが読んでいる後ろで、必ず親たちがのぞき込んでいます。親たちにも何か残ると期待しています。知らない他人が自分の子どもに読んであげているというのは、悪い気持ちがするわけはないだろうと思っています。結果がどう出るかは分かりませんが、私たちはそういう感触を受けています。

JiJi・BaBa のある人がしみじみ言いました。彼女は都筑をガイドする会もやっているのですが、「6年前まで札幌に住んでいたときは、趣味の会などで結構いろいろやってきたけど、横浜に来て JiJi・BaBa の活動や地域の活動をするようになって、まるで違ってしまった。自分のためでなくて人のために忙しい今の自分が一番楽しい」と言います。それが JiJi・BaBa の活動の素晴らしいところではないかと思っています。

5. つづきブックカフェ

最後に、これはレジュメにも載っていなかったことですが、私たちは「走らせよう！つづきブックカフェ」というプロジェクトを立ち上げました。先ほどから申していますが、都筑図書館はとても狭く、なかなか新しい図書館ができそうもなくて、何とかしてほしいと思ってきましたが、大都市横浜が変わっていくのはなかなか難しい。では、自分たちらしいやり方で、本がみんなのところに届く方法を考えてみたらいいではないかと思っているときに、Facebook で「鹿児島の指宿から全国へ！　走らせよう移動図書館」というクラウドファンディングのキ

ャッチコピーを見つけました。移動図書館！これではないか。車に本を積んでみんなのところに走っていけばいい。そして、市民版の発想で、移動図書館を走らせませんかというプロジェクトを立ち上げました。

10 月 28 日、鹿児島から指宿市の下吹越かおるさんをお呼びしました。皆さんご存じだと思いますが、NPO 法人本と人とをつなぐ「そらまめの会」の理事長で、市立図書館の運営をしていることで有名な館長です。写真の、窓の向こうにちょっと車が見えますが、これが有名な「そらま MEN 号」です。下吹越さんの話も本当に力強かったです。やはり実現するためには、思ったら行動していく。そうすると道が開けていくということだと思います。「走らせよう！つづきブックカフェ」の活動を後押ししているのも JiJi・BaBa たちです。本を積んで子どもたちのいるところに行なって開く 3 時間のカフェです。図書館や「あおぞら図書館」でやっているように、子どもたちに本を読んであげる時間・場になります。JiJi・BaBa たちは、手を広げて子どもたちを待ち構えてくれると思います。

どうぞ高齢者の活用の仕方という考え方にはならないでください。高齢者もこのように存分に楽しむのです。楽しむ活動をする上で、図書館はとても大事な場です。

図書館の寄り添い方としては、都筑図書館は図書館業務自体がとても忙しく、私たちに大きい時間を割くことはできませんから、必要なときに例えば「あおぞら図書館」に並べる本を選んでもらったり、「読んであげますよ～」のときには、選ぶのが難しい子ども用に選んで用意したり、そういうさりげない援助をしてくれていることが、私たちにとっては何より心強いです。

どうぞ見回してください。子どもの未来に思いをはせて、自分が何かをしたいと思っている高齢者がきっとたくさんいます。そんな人たちを見つけ出して、そういう場やグループをぜひたくさんつくっていってください。よろしくお願いします。今日はありがとうございました。

＜事例発表③＞

「瀬戸内市民図書館の高齢者サービス
～回想法、『認知症にやさしい本棚』の
取り組み～」

瀬戸内市立図書館
館長　嶋田　学　氏

今日は基調講演から数えると 4 本目の発表ですが、もうしばらくお付き合いいただければと思います。今日は、瀬戸内市で行っている高齢者サービスについてご紹介したいと思います。

瀬戸内市は三つの町が合併しました。市内には拠点図書館としての市民図書館以外に、牛窓地区の牛窓図書館、長船地区の長船図書館があります。市民図書館は「もみわ広場」という愛称が付いています。

1. 自己紹介

簡単に自己紹介をします。私は、豊中市で図書館員となりました。豊中市は人口 40 万人ぐらいで、大阪市のベッドタウンのようなところです。最初は移動図書館の担当から始まり、11 年余り居ました。そうこうするうちに、滋賀県永源寺町という人口 6500 人の町が、まだ図書館がなかったので新しくつくろうということで職員を全国公募していたのです。

豊中市の図書館ではやりがいを持って仕事をしていたのですが、当時は正規職員だけで 80 名ぐらいいて、かなり仕事も細分化されていて、私は整理パートということで資料の発注や受け入れ、書誌のコントロール、書誌メンテナンスをしたり、応援で参考室というレファレンスのカウンターに座ったり、貸し出し一般カウンターに座ったり、配架をしたり、困ったことがあったら整理パートに電話が鳴って、多くのことに対応するパートでした。当時は、MARC の書誌情報にこうするとうまく検索に引っかかるのではないかというようなものを入れたり、今では例えば某大手取次店のように、本当にかゆいところに手が届くような MARC もたくさんありますが、当時は書誌メンテナンスなどを一生懸命していました。

そうした中、永源寺町が職員を募集していたので、

そこにご縁を感じて試験を受けたら通していただき、2 年間準備して、新しい図書館が 2000 年に開館しました。館長と私と新人職員と臨時職員の 4 人で、23 カ所を移動図書館で回りながら図書館運営をしていたので、何でもかんでも自分たちでしなければならない状況でしたが、ご多分に漏れず、2005 年に 1 市 6 町が合併し、東近江市という人口 11 万 8000 人ほどの市の図書館として永源寺図書館は生まれ変わりました。私は、そのときに合併した旧八日市市や旧能登川町などの図書館に勤務して、また永源寺図書館に戻ってきました。ここで開館 10 周年記念のイベントなども担当しました。

2010 年、今いる瀬戸内市は当時の人口が 3 万 9000 人程度でしたが、合併したのが東近江市と同じ時期の 2004 年で、当時は合併した新しい市の都市計画のようなものに「図書館を造る」と書いてあったものの、なかなかできなかったのです。そんなときに、現在 3 期目の武久顕也市長が図書館整備などを公約に掲げて 2009 年に当選し、翌年に図書館のプロジェクトチームができました。そして、紆余曲折はありましたが、準備の段階で館長を全国公募することになりました。これは、私が自分で見つけたというよりは、ある人が「こういうのがあるのだけど、ちょっと行ってみないか」と強く勧めてくれたのです。そして結局、私ももうちょっと一緒に仕事をしたくてつらかったのですが、心苦しくも東近江市を離れ、これもご縁だと思って瀬戸内市に移りました。

瀬戸内市の図書館は当時、基本構想をつくりかけていたのですが、その段階で赴任して基本構想づく

りに携わり、それをたたき台として市民の皆さんからいろいろアイデアをいただくワークショップを、開館までに12回行いました。それによって基本計画づくり、実施計画づくりを経て、設計者を選んでからは設計図面づくりをしました。平面計画なども、市民ワークショップでご意見をいただきながらつくっていきました。かなり丁寧なプロセスを踏んできたと自負しています。そうして図書館が2016年に開館しました。

瀬戸内市は 2004 年に三つの町が合併してできたと先ほど申し上げましたが、三つの町は非常に特徴のある個性的な町です。邑久町は竹久夢二の生誕地ですし、長船町は備前刀という日本刀が生まれた町です。今も日本刀を作る刀鍛冶が 8 名います。日本刀の国宝は111振りあるのですが、そのうち47振りがこの備前の地で作られており、それぐらい日本刀の聖地といってもいいところです。ここで30秒だけ宣伝させていただくと、実は長船町で生まれた「山鳥毛」という国宝の刀は、今は個人所有なのですが、瀬戸内市がこれを保有するためにふるさと納税やクラウドファンディングなどを使って寄付を募っています。「山鳥毛」と検索するとかなり上位に出てくるので、ぜひご覧いただければと思います。そして牛窓町は瀬戸内海の多島美が美しい町で、岡山市のすぐ東隣にある町です。

さて、ようやく本題です。瀬戸内市で2011年から、私たちは図書館づくりの準備をしたのですが、同時に現状の図書館の状況を少しでも良くしたいということで、2011年から幼稚園・保育園に移動図書館車をまず走らせました。専用の車がないので、役場の軽自動車を借りて、当時19カ所を毎月1回、司書と2人で行なっていました。なぜかというと、子どもたちが一番、図書館に自力で行くのが難しいだろうから、優先順位を高くして子どもたちのところにまずは行こうと考えたからです。次に自力で図書館に行くのが難しいのは高齢者ではないかということで、特に施設に入所している方々のところへ 2014 年から移動図書館車を走らせました。これは後ほど詳しくお話ししていきます。

2. 民俗資料を活用した地域回想法

そうこうするうちに、呑海先生から今日の冒頭にお話があったように、「認知症にやさしい図書館」ということが「超高齢社会と図書館」という研究テーマの大きな切り口として素材にされていて、これは本当にとても大切だと感じました。

話が前後するのですが、実は東近江市の能登川図書館は 1997 年に開館したときから博物館と複合施設になっている図書館だったのですが、当時から生活民具などいろいろな道具類を文化財として集めていました。当時はまだ認知症の方々に対する回想法といわれるサービスを活用するところまではいっていなかったのですが、2004年ごろ、当時東京にあった認知症の研究所に勤務されていた永田久美子さんをお招きして、生活民具などを使った認知症のワークショップを行ないました。そのとき、私は初めてこういう世界があるということを経験し、当時は能登川図書館と博物館の学芸員、司書が連携して取り組んでいました。このときはまだ、呼ばれたら行くスタイルで、老人会などがあると図書館司書が昔話の紙芝居をして、学芸員は民具を出して回想法を展開していたのです。そのようなことがあったのですが、私自身は自分の図書館でそれをもっと深めたり、究めたりするところまでは行けずにいました。

そして瀬戸内市に来て、実は呑海先生のそういった研究がまだ今のような形になる前だったのですが、図書館が建っている場所が昔の古い校舎を使って郷土資料館を開いていた場所で、それを取り壊して図書館を建てたのです。では、その郷土資料館機能をどうしようかということになったときに、図書館の中で展開していくことになり、そのときに着目したのが郷土資料としての生活民具だったのです。これをうまく使って高齢者サービスに生かせないかと思ったわけです。

2-1. 移動図書館での回想法

そしてまず、先ほど申し上げた2014年の10月から、高齢者福祉施設を巡回する移動図書館車「いきいき・おとどけ便」を始めました。ご承知の方も多いと思いますが、田原市図書館が「元気はいたつ便」と

いうものをわれわれより先にやっておられました。私たちもこの名前はとてもいいと思い、ちょっとひねって「いきいき・おとどけ便」というネーミングにして、15 カ所を回り始めました。

高齢者の方々に喜んでいただけそうな本として、これも本当にステレオタイプかもしれませんが、大活字本や耳から楽しめる CD 本のほか、文学だけが好きな人ばかりではないだろうということで手芸・園芸の本や昔の俳優や女優の写真集など、いろいろなものを試しに持っていきました。そして、生活民具を高齢者施設に持っていって回想法をしてみようということになりました。

ご存じの方も多いと思いますが、回想法とは 1980 年代にアメリカの精神科医ロバート・バトラーが提唱して始めた心理療法で、これは医療の領域での取り組みでした。もちろんわれわれは医療行為としてではなく、社会教育活動として、生き生きとした時間を楽しんでいただくために始めました。高齢者施設でケアのスタッフの皆さんがいろいろなレクリエーションをされていますが、ネタに困っておられます。図書館が月 1 回ですが行って、そういうレクリエーションの一環として、本に絡んだものや地域の文化財に絡んだものをやろうということになりました。

これは、比較的小規模なグループホームで行っている様子です。学芸員がお釜やおひつ、また何という名称か忘れてしまったのですが、竹（わら）で編んだようなおひつの保温道具などを持っていって出すと、高齢者の方々は本当にどんどん言葉が出てくるので、私たちもとても驚きました。

瀬戸内市には入所・通所の両方をやっている高齢者施設が 24 カ所あったのですが、希望を聞くと 15 カ所から手が挙がったので、そこに巡回を始めました。さらに、「回想法というものもあるけど試してみますか」と尋ねると、8 カ所から希望がありました。それで、先ほど申し上げたように、そこへ行って貸出をするのですが、個人の貸出を希望する施設には個人カードを発行します。本の管理を施設としてきちんとやりたいところには、団体登録をしていただいて団体貸出をします。両方を併用しているところもあります。

昔話の絵本や落語の紙芝居、最近では皆さんのところでもやっているかもしれませんが、高齢者向けの紙芝居も出てきました。「金色夜叉」など昔のお芝居や映画になったようなものを紙芝居にしているものです。その中で、地域回想法として学芸員が民具を持っていって高齢者の方々のお話を引き出すということをしています。スタッフの方に聞いたのですが、普段あまり言葉の出ない方、特に男性が多いのですが、「回想法のときだけ、すごくにこにこ笑って元気に言葉が出てきている」という話もありました。

それと、これはちょっと回想法とは関係ないのですが、高齢者サービスとして高齢者の皆さんにいろいろな本を届ける一環でのエピソードです。これは聞いた話なのですが、入所してからふさぎがちな女性がいらっしゃいました。その方は犬と一緒に暮らしていたのですが、入所しなければならなくなって犬との生活ができなくなりました。あるとき、図書館が持っていった犬の写真集を見つけました。犬や猫の写真集はとても人気があるのですが、その方はそれを本当にじっくりゆっくり慈しむように見ていたそうです。時には涙を流しながらページをめくっていて、いろいろ思い出話をスタッフにもしながら、最後はとても穏やかな表情で本を閉じ、その 1 週間後に亡くなられたというのです。

その施設のスタッフの方は、ふさぎがちだったその方に一生懸命、介護福祉士としてスタッフとしていろいろ元気づけようとしてきたけれども、その人が自身で見つけた本を自分で手に取り、とてもいい表情をしていたことを振り返り、「もしあの本に出会っていなければ、ふさいだ気持ちのままで亡くなられたかもしれない。福祉の仕事に携わる者として、とても大事なことを教えてもらいました」と言っておられました。すなわち、一人一人が主体的になって何かに向き合い、自分が好きなもの、自分が好きだったものも含めて、それはたまたま 1 冊の写真集だったのですが、そういった出会いをつくるのもスタッフの皆さんの仕事なのだとおっしゃっていて、われわれも本当に巡回することの重要さを感じました。

2-2. 図書館内での民具展示

それから、先ほど申し上げた郷土資料館的な機能を図書館の中で展開するために、十分な広さは設けられないのですが、いろいろな切り口で企画展を年4回程度、例えば農業のことやお酒のこと、お祭り、宗教の祈り、神社仏閣などのテーマで開いています。現在、瀬戸内市には国立のハンセン病療養所が2カ所あるので、そういうことをテーマに差別と人権についても展示をしました。いろいろやっている中で、先ほど申し上げた民具の生活道具などの展示も行なっています。

閲覧室の通路の一部には、カウンターを設けて道具を置いています。通常、例えば郷土資料館は図書館に併設されているケースも幾つか見ましたが、1カ所に集められているのです。興味のある人は見に行きますが、そうでない方はなかなか足を運びません。しかし、この図書館の場合は、本棚の間を巡る、あるいは閲覧室の間を回遊しているうちにこういうものとばったり出合います。期せずして民具と出合うわけです。そうすると、とても懐かしがって見てくださいます。

これは、いわゆるハンズオンと呼ばれる方法で、触ってもいい状態で展示をしています。「台に置いたまま見てください」というふうにお願いしてあります。これは「手続き記憶」と呼ばれるようです。回想法の中でいろいろな記憶を呼び戻すときに、視覚的な記憶から昔の記憶を呼び戻すこともあるのですが、触ってみるのです。例えば、昔の五つ玉のそろばんやおひつ、アルマイトの弁当箱、こたつのつまみなどを触ることによって、昔使ったという記憶、いわゆる「手続き記憶」が呼び起こされるといわれています。これも館内でご覧いただけるようにして、高齢者同士が懐かしそうにお話をしたり、おじいちゃんがお孫さんと一緒に来て、お孫さんに「こんなふうに使っていたのだよ」とお話ししてあげたりするシーンが見られます。

あるとき、アルマイトの弁当箱をおばあさんが透かして見ていたのです。「何をしていらっしゃるのかな」と思って、「おばあさん、何をしているの？」と聞いたら、「いや、梅干しの酸で穴が開くんじゃ。開いとる、開いとる」とおっしゃるのです。私などは想像もつきませんが、梅干しの酸で弁当箱に穴が開いているのを確かめたいと思われたわけです。それは一人でやっているケースもありますし、複数の方がそれでとても盛り上がっているケースもあります。

あとは、真空管です。割と大きなサイズのラジオがありました。それを小学校3年生ぐらいのお子さんにおじいさんが、「これは何だか分かるか」と聞いているのです。その男の子は一生懸命考えて、「電子レンジ」と言いました。電子レンジに見えなくもありません。どちらかというとオーブントースターぐらいの感じなのですが、そこでおじいさんがにこにこと笑って「これはラジオといって」とラジオの説明をするのです。いくら丁寧に説明しても、その男の子の家にはラジオがありませんから、全くちんぷんかんぷんなのです。しかし、おじいさんは喜々としてお孫さんにラジオのことを語って聞かせています。自分が子どものときにまだテレビもなく、ラジオが唯一の娯楽だったということを、本当に楽しそうな表情でお孫さんに聞かせているのがとても印象的でした。

ラジオの写真はこれで、これがそのおじいさんが小学校3年生の男の子に言っていたものです。

2-3. 地域回想法の広がりを目指して

このように、懐かしい民具などを使っていろいろな地域で地域回想法が行われています。そして、できるだけ触る体験、ハンズオンが望ましいといわれています。先ほどお話ししたように、われわれが高齢者施設に行って介在するケースもありますが、ただそこにものがあるだけで高齢者同士が勝手に盛り上がってくれます。それは、ものの持っている力、その人の体験とものが出会うことによってそういう楽しい時間が生まれているということなのですが、こういったことが本当にいろいろな図書館でも行われるといいと思います。

われわれのところは、もともと郷土資料館だった所にたまたま図書館を建てたので、そういう機能を持たせようという方向が決まった段階で、社会教育課の学芸員に図書館の準備をしている段階で兼務で

入ってもらい、どんなふうに図書館で地域郷土資料を見せていくか、活用していくかという議論を重ねてきました。先ほどご紹介した、市民の皆さんから図書館の計画づくりに対するご意見をいただく市民ワークショップでも、そういった昔の暮らしや文化・歴史をどう生かして図書館でお伝えしていけばいいかというアイデアも募っていました。そのような準備を経て、図書館ができる前から移動図書館車で地域に出て地域回想法を行っていたのですが、図書館ができればぜひ館内でもお見せしようということで、写真でご覧いただいたような展開、取り組みをしています。

実は、こういう取り組みには先輩がたくさんいらっしゃって、有名なのが、現在は北名古屋市になっていますが、師勝町という町です。ここが古くから、そういった生活民具を中心に文化継承をしていくことが一義的なのですが、それを使った回想法の取り組みにも早くから着手していました。われわれも開館前に、ここの館長さんである市橋さんをお招きして、「回想法とは何か」を学ぶ機会も持ちました。われわれ自身が学びたいということと、地域の方々にも関心を持って見てもらって、自分たちが知ることによって例えば地域社会で市が持っている文化財をお貸しして、地域でも回想法を市民の皆さん自身にやっていただけるようになると良いという発想です。

先ほど紹介した東近江市の能登川博物館では「市民学芸員」という呼び名で、それぞれ好きな分野、自然の分野が好きな方もいるし、農具や民具に関心のある方もいるので、そういう方たちが学芸員から一定のレクチャーを受けて、地域学習でそういった方々に活躍していただく活動が 2000 年代から始まっていました。私たち図書館員や学芸員ができる範囲は限られているので、こういったことに関心のある地域の方々に一定の知識やスキルを身に付けていただいて、地域でこういった回想法をどんどん展開していただけるようになるとどんどん広がっていくのではないかということで、2016 年度には公民館との共催で地域回想法の普及を目指す連続講座「地域回想法元気講座」を行いました。そういうことで広げていければと思っています。

3. 「認知症にやさしい本棚」

「認知症にやさしい本棚」は、基調講演で呑海先生から詳しいお話がありました。私もその取り組みにとても刺激を受けて、瀬戸内市民図書館で「認知症にやさしい本棚」を展開しています。これについては、棚を作ってサービスを展開する手前に、部の経営計画というのが毎年あって、教育委員会なら教育部、あるいは総合政策部や市民部、健康福祉部などいろいろな部があるのですが、教育部の中で各課が今年度はこういうことを重点的に行うという計画があって、その中に「認知症にやさしい図書館」を標榜することを計画に挙げました。その一環として、先ほどから紹介している回想法による取り組み、高齢者施設に移動図書館車が巡回している取り組みなどもあるのですが、新しい取り組みとして本棚を一つ設けようと考えました。

市民図書館は 2 階建ての構造になっています。1 階部分は比較的ニーズが高いもの、子どもたちにアプローチしてもらいやすいものということで、児童書と一般書の文学関係の本、それから家政学系を中心にした暮らしの本を並べ、それ以外の一般書、日本十進分類法でいう 0 類から 8 類までを 2 階のフロアに並べています。そうすると、例えば認知症の関連では、医療の関係は 4 類になります。また、高齢者介護という観点では 3 類になります。つまり、1 階では見ていただけないので、2 階に上がっていただかなければなりません。2 階に上がっていただいても、3 類と 4 類の本が並んでいる場所が離れています。例えば 50～60 代の方の利用状況を見ていると、好きな作家の小説を借りて、それから少し料理の本なども借りて、「そうだ、ちょっと孫に絵本でも借りて帰ろうかな」と児童コーナーで絵本を借りると、それで大体 10～15 冊になって、2 階に上がらずに 1 階のサービスカウンターで本を借りてそのまま帰ってしまうケースがあるのです。別に認知症に関する本が 50～60 代の方だけに限定利用されているという意味ではないのですが、1 階でもそういった本に出合っていただきたいということで、「認知症にやさしい本棚」を 1 連設けました。

もともと私たちの図書館の暮らしの本の棚は、い

わゆる家政学系の本だけではなくて、もう少し暮らしの範囲を広げて「暮らしを守る」という観点の棚作りをしていました。例えば防災関係の本を「暮らしを守る」という観点に置いていましたし、社会保障系の本では年金や生活保護や障害者の方のためのさまざまな助成金など、それから比較的家政学系のところはジェンダー的に女性の利用が多いので、今は仕事を辞めたけれどもそろそろ子どもも大きくなったから仕事に戻りたいといった切り口の出版物もたくさんあるので、復職したい方のための仕事の本などを開館時から置いていました。その流れで認知症の本を置きました。

カテゴリーを「認知症とは？」といういわゆる入門的な本と、「本人と家族のために」という当事者向けに比較的重きを置いた編集の本、それからもう少し突っ込んだ医療系の本で「認知症の治療と介護」というテーマ、それから「認知症を防ぐ」という主に介護予防的な観点から編集をされた本の大きく四つに分けました。あとは、地域包括支援センターとの連携も行なっているので、そこがいろいろ配布しているような、持ち帰り可能なリーフレットやパンフレットなども一緒に置いて見ていただいています。

これは 1 連の様子です。今はもう少し本が増えているのですが、これはできた当初の本棚の様子です。こういった「認知症にやさしい本棚」という看板を設けています。

それから、もう少し詳しく知りたい方のために、2 階では医療の本や高齢者介護の本が何番の棚にあるかという、いわゆる「(・・・) をも見よ参照」も配架図付きでご案内しています。こんな感じで、見出しを入れて本を並べています。

4. 地域包括支援センターとの連携事業

先ほど、地域包括支援センターとの連携の話もしました。教育部の経営計画で「認知症にやさしい図書館」を目指すという発想したときに、準備活動としてまず図書館員がよく理解しないといけないだろうということで、認知症サポーター養成講座を月末の整理休館日に、地域包括支援センターにお願いして受講しました。それから、図書館の方で認知症サポーター養成講座の会場にさせてもらえないかということで開催しました。普段、地域包括支援センターは当市の場合、社会福祉協議会に委託して展開してもらっていて、福祉会館を会場にしています。大体 40 人ぐらいの参加者なのですが、図書館で開催したときに 70 人ぐらい来てくれたのです。これは包括支援センターの皆さんもすごく喜んで、図書館でたまたまチラシを見て入ってくれた人などもいて、やはり不特定多数の人が来てくれる図書館で行なうメリットはたくさんあるという話になりました。

その頃、「認知症カフェ」はご存の方もいらっしゃると思いますが、オランダやイギリスで始まったもので、認知症の当事者や家族の方、介護の専門職の方、場合によっては医療者も入って、認知症について理解を深めるためにざっくばらんに、まさしくカフェで飲みながら食べながらお話をするという取り組みが、日本では 2010 年ごろから始まったと思います。この辺は正確に覚えていないので、明日のパネルディスカッションで呑海先生に正確に教えていただければと思いますが、地域包括支援センターはぜひこれをやりたいと思って、新しくできた図書館でできるといいなと思っていたらしいのです。われわれも地域包括支援センターと連携で、こういうことができると良いなと思っていました。

こちらの方から恐る恐る「認知症カフェを、図書館を会場にして開いてもらえませんか」と言ったら、「えっ、実は私たちも図書館でやりたいと思っていたのです」と言われて、相思相愛だったことが分かったのです。連携でお願いしたときに「いや、ちょっと」と断られると若干傷つくので、ドキドキもするのですが、意外に向こうも図書館を使いたいと思っているかもしれないということに気付かせていただきました。そんなことで、まだちょっとできてはいないのですが、認知症カフェについては企画を練っているところです。

5. 高齢者の「学び」を応援

先ほど呑海先生からもありましたが、本当にこれから待ったなしです。日本はある意味、高齢者・高齢化という問題では世界の中でも課題先進国という言

い方がされますが、このことを恐れるのではなく、人生 100 年時代を生きていくために、むしろ積極的に捉えられればと思います。NHK のあの衝撃的な番組を、私もたまたま見ていました。実は、健康寿命は図書館とこんなに因果関係があったのかということを、本当にいろいろアピールしていきたいと思います。あくまで AI の分析で、なぜそうなのかが分からないということなので、これは本当に研究領域としての余地がたくさんある、とても魅力的な領域かもしれません。

15 歳未満の子どもたちの比率が下がっていくということも考えながら、一方で人生の締めくくりを過ごしておられる世代のことも同時に考えていかなければなりません。私が好きな言葉で、教育基本法に「人格の完成」というものがあります。これは、死ぬ瞬間まで終わらないのだと思うのです。そういう意味で高齢者サービスという切り口は、人格の完成に向けて自分が一人の人間として満足がいくような、「よく頑張ってきた。もう死んでもいい」と思えるような生きざまを応援する教育や文化の取り組みではないかと思ったりもします。

われわれのところで、そういった世代の方々に向けて行っている特色あるサービスとしては、放送大学のテキストを全点購入して並べています。大学院科目も含めてです。放送大学は、ご存じの方も多いと思いますが、シニア世代の学生がとても多いのです。学び直しということで学生がどんどん増えています。ですので、放送大学はどんなことを勉強しているのかというのを現物で見ていただきたいのです。テキストを全部並べると 4 連分ぐらいになるので、かなり壮観です。「こういう科目があるのか」と実際に手に取ってみていただいて、それを一つの自分の学びとして借りていただいて、読書として終わってもいいし、「こんなのだったら学生になってみたい」と思うかもしれません。

ただ、一度に何科目も受けるのは大変だから、1 科目からというのもありだと思います。放送大学は 1 科目の履修からできます。8 年かけて卒業できて、学士の学位が取れます。しかも、学費もとても安いのです。テキストは版が毎年変わったり、あるいは担当の先生が変わると科目名も若干変わって新しくなります。大体年間 15 万円ぐらいをかけると更新できることが分かったので、毎年 15 万円ぐらいかけて、版が変われば買っています。古くなったものは放送大学のテキストのコーナーからはずして、例えば心理学の本なら心理学のところに置いたり、学校図書館の本なら学校図書館のところに置きます。そのようにして、放送大学の資料がそこにあることを分かっていただくようにしています。これは、近くに高校もあるので、高校の皆さんに大学教育を身近に感じてほしいという狙いもあります。

それから、実はこれはやってみて分かったことなのですが、市民ワークショップで「DVD の視聴ブースを作ってほしい」という声が結構あったのです。でも、場所を取るし、機材が古くなっていくとそれを更新する費用もばかにならないので、どちらかというと借りて帰って見ていただくか、映画会を開いて大きなスクリーンで楽しんでもらいたいのです。そうはいうものの、やはりパーソナルに見たい方もいるだろうということで、ポータブルタイプの DVD プレーヤーとヘッドホンを 5 セット用意したのです。どうしても館内で見たい方がいたときに、半分逃げ道のようなことだったのですが、これが意外に高齢者に受けています。懐かしい DVD を借りて図書館で一人楽しむのです。当館は飲み物 OK なので、自動販売機で買ったコーヒーを飲みながら映画をご覧になっている高齢者が意外と多く、こういう切り口もあるのかと思いました。

それから、自由に使っていただけるインターネット端末が 8 台程度あるのですが、夫婦でいらっしゃって旅行先のいろいろな情報を仲むつまじく見ている高齢者がいらっしゃるのです。あとは、高齢者の方で、インターネットには興味があるのだけど使い方がよく分からないという方がいます。私たちの図書館のインターネットブースの近くにはレファレンスカウンターがあるので、時々目配せして、ちょっと使い方に困っている方がいたらサポートをさり気なくします。公民館ももちろんインターネット講座などを開いているのですが、「そういうのを受けるのもちょっとなあ。でも、インターネットを自由に使

えるならちょっと使ってみたいな」という人に、こういうサポートをさり気なくできます。これから高齢者になる方は、そういったことに慣れている方もどんどん増えてくると思うのですが、今は過渡期だと感じています。

これからの高齢者サービスでソフトの部分がまだまだだと呑海先生からもご指摘がありました。私は、新しい戦後教育を受けた世代とその前とで、感性や経験がちょっと違うのではないかという仮説を立てて、何かサービスメニューを組めないかということをもう少し考えています。エージングという意味では前期高齢者・後期高齢者という分け方もあるかもしれないのですが、1940 年に生まれた人が 1947 年の学校教育法ができたときに小学校 1 年生なのです。そこから新しい戦後教育の世代が始まりました。そういう人たちとその前の世代の人たちは何が違うのかというのが気になっています。それはまだ仮説の手前という段階で、何かお話しできるようなレベルではないのですが、これからいろいろやることはいっぱいあると感じています。

大変雑ぱくなお話で恐縮でした。不十分な部分がありましたら明日のパネルディスカッションでご質問していただき、また私も後で気付いた補足などをしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

＜全体会（パネルディスカッション）＞

「超高齢社会の中で図書館の果たすべき役割とは」

コーディネーター：呑海　沙織　氏
パネリスト　　：岩城　典子　氏
江幡　千代子　氏
嶋田　学　氏

○呑海氏

皆さま、おはようございます。昨日の情報交換会では、私はたくさんの方とお話することができました。皆さまはいかがでしたか。今日は２日目のパネルディスカッションですが、約２時間あります。どのように進めるかということで、岩城さん、江幡さん、嶋田さんとお話ししたのですが、まずは皆さんからいただいているご質問がありますので、それにお答えする形で進めたいと思います。

そして、その後はできるだけ、今はどの交流会でもこういう取り組みをしているという声をたくさんいただいたので、皆さまから取り組みをご紹介していただく機会もあればいいと思います。もし、こんな取り組みをしているということがありましたら、心の準備をしていただければと思います。

昨日、さまざまな高齢者サービス、認知症に関わるサービスをこちらの皆さまと考える機会をいただいたのですが、その中から情報交換会でさまざまな声を伺いました。例えば「高齢者サービスは、高齢者が増えているのでしないといけないけれども、どうして良いか分からない。お金もないし、人もいない」という声も多々ありました。

そんな中で、昨日もお話ししていたのですが、今あるものをどう活用するかということからまず始めるのが重要だと思います。高齢者サービスを始めます、認知症支援を始めますと大上段に構えるとなかなか難しい面があるので、今あるものを活用する、できることから始めるところが重要だと思っています。そういう観点から今日もディスカッションできればと思います。

では、昨日の発表順とは逆に、皆さまからの質問にお答えしたいと思います。まず、嶋田さんへの質問です。嶋田さんへの質問は、いくつかあるのですが、順番にお願いしてもよろしいでしょうか。まず１問目ですが、「瀬戸内市立図書館は市直営の館ですか」という質問です。

○嶋田氏

直営で運営しています。この経緯についていろいろとご紹介しようと思うと時間が必要になります。詳しくは『出版ニュース』という雑誌の2015年４月中旬号に、当市の武久顕也市長が「私が新瀬戸内図書館を公設公営にした理由」という論考を寄せているので、ご興味のある方はお読みいただければと思います。背景などもう少し突っ込んだ話が必要であれば、また手を挙げておっしゃっていただいたら、お時間をいただける範囲でまたご説明します。

○呑海氏

ありがとうございます。では次に、他部署との連携も一つのテーマだったと思いますが、「他部署との日常的な関わり方をどのようにされていますか」という質問です。

○嶋田氏

当館は2016年６月に開館したのですが、その約１年前に各部署に向けて、「図書館という窓口から各部署で市民にアピールしたい政策や事業について書かれたような資料、パンフレットやリーフレットを図書館へ送ってください」とお願いしました。また、必要に応じて図書館の空間を貸して、例えばワークショップや講演会の会場にぜひ使ってほしいとアナウ

ンスしました。

すると、最初に反応したのが下水道課でした。ちょうどオリジナルのマンホールデザインを決めようとしていたのです。最初は数十点応募があったらいいだろうということで、役場のちょっとしたスペースで展示しようとしていたのですが、118 点ぐらい来て、場所がなくなり、図書館を使わせてくれということになったのです。図書館を会場に、応募された百十数点のマンホールデザイン展を 2 週間ぐらい行いました。その審査委員会も図書館の集会室で行いました。われわれとしても、下水道に関する資料として一般的に出ている書籍や、マンホールデザインについても 3 タイプほど既に本があったので、それを展示しました。下水道課は「下水道課の仕事」というパンフレットを作って、もちろんそれもお持ち帰りいただけるように一緒に展示しました。それが最初のワークショップとの関わりでした。

その後、人権啓発課から人権に関するイベントや人権週間に合わせた講演会を開かせてほしいとか、危機管理課からは防災ワークショップを行わせてほしいという依頼がありました。また、企画課は市内への移住者を対象に、テレワークのような仕事の仕方があるということを広めるワークショップを開き、それに合わせて図書館で関連する本を「集いの部屋」という集会会場に持っていって貸出につなげたりしました。それに関連して、今回のテーマである高齢者に対するサービスについては、最初はいきいき長寿課に相談に行ったら地域包括支援センターの担当者を紹介されて、そこから連携が始まったという状況です。

○呑海氏

大変貴重なお話をありがとうございます。私はいくつかこういう取り組みでインタビュー調査をしていて、川崎市の福祉行政の方に「図書館での認知症の取り組みをどう思うか」というインタビュー調査をしたことがあるのです。その方は、「図書館は行政のショーケースだと思っています」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。嶋田さんがまさしくおっしゃっていたように、市町村の方針を住民に知らせるために、市役所に置いてもなかなかパンフレットがなくなりません。それが、図書館に置くとまたたく間になくなるのです。これはまた別の図書館ですが、比較したら図書館の方が 5～6 倍早くなくなったという話を聞いたことがあります。そういう意味では、図書館にそういう特質があるということで、行政の方にも PR できると思いました。

○嶋田氏

全く共感します。われわれのところも、手前みそですけど、「置いたら本当にすぐなくなるね」と言ってもらってとてもうれしいです。

○呑海氏

ありがとうございます。では、少し変わって民俗資料の展示中の管理方法についてお伺いします。「資料に触れることができるようにしていますが、汚損・破損を防ぐ方法があったら教えていただけますか」という質問です。

○嶋田氏

当館は、ささやかながら郷土資料の展示をしているので、保管のスペースとして郷土資料保管庫を設けていて、温湿度管理をしています。ただ、それほど難しいものはなくて、文書でも近世あたりと、生活

民具で湿気に弱いものに限って保管しています。それ以外のものは、別に割と大きめの収納庫があるので、分離して保管しています。

それから関連の質問で、展示をしている中で破損を防ぐ方法についてというお話がありました。われわれの展示方法については、昨日少し触れたかもしれませんが、南山大学の人類学博物館へ視察に行ったときに非常に刺激を受けました。資料に触れる展示をしておられて、それは国立民族学博物館の展示が元になっているようです。平面だけでなく、垂直の面を使って展示物を見せていたのはとても刺激的でした。

そのときに、私は全く同じ質問をしたのです。「これだけ資料に触れるようにしていて、壊れることはないのですか」と質問したところ、「壊れた場合は直せばいいという考え方でやっている」とおっしゃっていました。つまり、壊れることを前提に展示しているということです。もう少し突っ込んだ話をすると、壊れてしまっても良いような、正確にいうと類似したものがあるということです。一点物は基本的にそういうふうに展示しないという考え方が、お話を聞いて分かりました。われわれも壊れたら直して、直せなくなったら困るようなものは展示しないという方針でやっています。

ただ、皆さんとても丁寧に見てくれていて、子どもたちも珍しいからといって展示資料に触るとしても、恐る恐る触っている感じで、激しく扱うことは、幸いにして今のところ起きていません。

○呑海氏

ありがとうございます。私も瀬戸内市民図書館に伺って展示を拝見しましたが、図書館に入ってすぐのところにあるのでとても目立ちますし、そこを通っていろいろな所に行く感じなので、無意識に目に入る所に置いてあって、素晴らしい展示方法だと思いました。

回想法のところにも通じていくのですが、触感も記憶を呼び覚ます上で大変有効だといわれているので、資料に触れる展示は今後ますます重要になると思っています。また、汚損・破損を防ぐ方法に対する考え方は、もしかしたら図書館資料の考え方にも通ずるところがあると思って拝聴しました。

では次に、「認知症にやさしい本棚を設置予定なのですが、利用率や利用者の反応について教えてください」という質問です。

○嶋田氏

テクニカルな話になりますが、われわれのところは「認知症にやさしい本棚」として1連分あります。そこに置く本については、いろいろな呼び方があると思いますが、われわれのところでは配架区分というもの、あるいは置き場所という名称にしているところもあると思いますが、それを設定しているので、配架区分ごとの貸し出しの統計は取れるようになっているのですが、恥ずかしながらまだ年間で何冊出たかというのは集計していません。帰ってすぐ、1年間にどれぐらいだったか確認したいと思っています。お答えできなくて申し訳ありません。

あとは、反応を見ていると、昨日写真でご覧に入れたように、最初は大した点数ではなかったのですが、積極的に選書しているので、点数は増えています。ただ、棚に置ける本の数はそれほど増えているように見えないというか、それだけ出ているのかなと感じています。ここに置いているパンフレット、リーフレット関係も、今まで地域包括支援センターに何度かおかわりをして、順調にはけているという印象があります。2 階の高齢者介護や福祉のところにも同じようなパンフレットを置いているのですが、1階の暮らしのコーナーの「認知症にやさしい本棚」の方が、パンフレット、リーフレットの出は良いと感じているところです。

○呑海氏

ありがとうございます。「認知症にやさしい本棚」は増えてきていると思いますが、これから設置されるところでぜひ検討していただきたいのは、置く場所と冊数と目的です。場所については、これは目的とも関連するのですが、認知症に関する本を見ている姿を見られたくないと思う方がいらっしゃいます。そういうことを考えると、図書館の奥まった、あま

り目立たない所に置く方法が一つあります。イギリスの図書館を見ていると、そういう方策を取っているところがまま見られます。一方、「認知症の人にもっと来てください」、「認知症に関する取り組みをしていますよ」とアピールするのであれば、目立つ所にあえて置く方法もあると思います。ですから、意識的に場所は選んだ方がいいと思います。

冊数も多ければ多いほど良いのではなく、ある程度コンパクトなものの方が入り口として入りやすいというのがあります。これもイギリスの例ですが、二十数冊しかありません。「入り口をたくさんにするとかえって迷ってしまうので、あえて絞っています」とおっしゃっていました。

目的は何かというと、誰に向けて本棚を開いているのかということです。認知症の人の家族、いわゆる当事者と呼ばれる方のために置いているのか、あるいは昨日お話しした社会的偏見をなくすような、一般の方に「認知症とは何か」ということを知ってもらいたいのか、あるいは専門家としてケアする人たちに専門知識を得てほしいのか。重なる部分もあると思うのですが、そういう目的を設置するときに指定すると良いと思います。

この他に何か、嶋田さんのところで意識されているものがあれば、お願いします。

○嶋田氏

ありがとうございます。全くおっしゃるとおりだと思います。少し話が飛躍しますが、健康医療情報棚を設置する図書館も出てきていると思うのですが、前に東近江市の能登川図書館にいたとき、比較的分かりやすい所に作ったのです。今の呑海先生のお話ではないですが、見られていることを意識して、もう少し隅の方がいいのではないかという意見もありました。ただ、認知していくという観点でいうと、やはり見つけやすい場所も必要だろうと思います。われわれのところでは、そもそもの始まりが、2階に置いてある医療系の認知症の本、介護系の認知症の本がなかなか思うように利用者に届いているという実感がなかったのです。それで、先生がおっしゃったように、誰に向けてどういう目的でということでいうと、広く知ってほしいという観点で作ったということを改めて認識した次第です。

○呑海氏

貴重なお話をありがとうございます。では次に、「地域包括支援センターと連携して認知症カフェを初めて開催する予定です。回想法として、デジタル化された地域新聞を活用して参加者と話し合ったりしたいと考えています。実施に向けて、アドバイスをお願いします」という質問です。

○嶋田氏

アドバイスというほど材料があるわけではないのですが、また滋賀県のときの話で恐縮なのですが、実際に昭和 30 年代の古い写真がたくさん寄贈されたことがありました。それを四つ切りサイズに拡大して素材にしました。当時、回想法という意識で施設に向けてやってり、そこまでのことはしていなかったのですが、図書館を会場にそういった取り組みをしました。写真は大変効果的だと思います。生活用具は、それほど地域性と深く結び付くわけではないのです。地元の写真は、まさしく自分が生まれ育った地域だったり、場合によっては自分の知っている人がそこに写っていたり、被写体のこの人が先月亡くなったなという話が出てきたり、とてもリアルな会話が出てくるので良いと思います。

瀬戸内市も、「みんなでつくる瀬戸内デジタルフォトマップ」というものをウェブ上で公開しています。これを作るときにワークショップを開いたのです。アイデアとしては、ただ思い出語りはもちろん楽しくていいのですが、昨日お話しした役割や場面をつくるという点では、参加していただいた方に「この写真のキャプションを作るためにいろいろな情報をください」という目的でワークショップをするのです。そうすると、いろいろな記憶が出てきます。自分が語ったことが記録に残って、それがインターネット上で公開される写真のキャプションとして付くという具体的な目的が明らかになると、参加者のモチベーションもかなり上がるのではないかと思います。

それをしているときに、私たちがポイントとして

考えたのが、どこで撮られたかが不明な写真もあるので、それをつかめると良いなということです。また、何をしているのかよく分からないような写真もあるので、これは何をしているところかということをつかみたいと思っています。それから、昭和30年代であることは大体分かっているけれども、昭和30年代の初めごろなのか、40年代に近いのか、いつ頃かということも見る人が見ればかなり精度が上がってきて分かるのです。

それから、聞いていて面白いのが、写真に写っていない周囲の背景です。この奥にこんなものがあったというような話も出てきます。また、その時代の思い出話も出てきます。思い出話には二つあって、私はこの頃こんなことをしていたのだという個人的な回想と、もう一つは時代的、集団的な回想です。私たちはこの頃、みんなでこんなことをした、こんなことをさせられたというと表現があれですが、昭和30年代というとまだまだ今のような自由な教育の雰囲気でもないので、そういう集団での思い出も出てきて、とても面白いと感じました。とてもいい情報だと思うので、行なった後はフィードバックを何かの機会にしていただけるとうれしいと思います。

○呑海氏

ありがとうございます。素晴らしいです。イベントをやるだけでなく、成果物につなげることで参加者のやる気も変わってくるし、ご自身が参加したことによって何か残る、役に立つことがある、大げさにいうとその方の生きがいにつながると思うところです。

回想法という方法にはさまざまあるのですが、私は大きく分けて三つのアプローチがあると思っています。一つ目は、心理学的アプローチです。心理療法士であったり、少し言い方は悪いですが、実験的な意味合いも含めて、例えば全部で10回やって、1回目はこれをやって、2回目はこれをやって、3回目はこれをやって、それをやったことによってどのような効果があったかを測定するものが一つです。

二つ目は、ケアに特化したというか、ケアに力を入れたものです。例えば作業療法士や看護師が行なっているようなケアを目的としたもので、あまりかっちりとはしないけれども、医学的見地からケアに重点を置いてアプローチするものです。

三つ目は資料に重点を置いたというか、資料からのアプローチで、博物館などのアプローチはこれに入ると思っています。私は嶋田さんの話を伺って、瀬戸内市民図書館はこちらの方に入ると思っていたところです。図書館も資料からのアプローチが入りやすいと思います。

一方で、医療・心理学系の人と連携することによって心理学的アプローチの回想法もできるし、あるいはケアの領域、看護師や作業療法士と組むことによってケアのアプローチの回想法ができると思っています。そういった意味では、誰とどう手を組むのか、何をしたいのかというところで図書館はとても関わりやすいと思います。そういったところも考えながらプランニングをされたら良いと思います。

それから、回想法をどうやるのかという本も出ていて、ウェブサイトにもアップされています。一つお薦めが「MY介護の広場」という介護総合情報サイトで、明治安田生命グループが出しているものです。「心を開く回想法」ということで、回想法とはどんなものか、回想法の効果、回想法を実践するときにどんなことに気を付けたらいいかということが書いてあります。今回紹介したのはこの部分です。1番から5番まであるのですが、「語り手の尊厳を守る」、

「語られた人の尊厳を守る」、「回想法参加者全員がそこで語られたことを他言しない」、「語り手の話が毎回変わっても否定しない」、「相手が話したくないことは無理に尋ねない」ことが基本になると思います。

コーディネーターの方が入ると思いますが、そういった方がこういうところに注意しておくのとおかないのとでは随分違います。参加者同士で言い争いになることがあるのです。例えば同じぐらいの年代の方が「私が小さい頃は学校にストーブがあって」と言い始めたら、「いやいや、私たちのときはストーブはなかったでしょう」と言い争いが始まったりすることもあるのです。そういったことが起こったときも、こういったことでうまくコーディネートできればと思います。

では、最後です。「回想法で、生活の道具や遊びの他にどのようなテーマで行っていますか。また、重度の認知症の方への対応はどのようにされていますか」という質問です。

○嶋田氏

今のところ民具を中心にやっていますので、瀬戸内市の場合は当時の遊びや暮らしが中心です。これが写真になると、もっと広がっていきます。写真で切り取られている場面で、自然についても語ることができます。当時、工場ができていて、うちのおじさんがここに働きに行っていたという話が出たり、今はありませんが、レールの跡地が写真に写っていると、瀬戸内市でも当時は電車が近くまで来ていたという話に広がったり、地理的なこと、歴史的なこと、生活文化、産業などとても広がっていきます。そういう意味では、素材を写真にしていろいろな場面をあらかじめ確認した上で、そのときの出会いに絞り込んだり、あえて絞らずに拡散したりしても良いと思います。そういうことでは、写真の素材が持っている可能性はとても大きいと思います。

また、重度の認知症の方への対応はどのようにされていますかというお尋ねもありました。それは施設のスタッフとの連携です。あらかじめどういう方が参加するかという情報をつかんだ上で臨むことにしています。先ほど呑海先生からご紹介があったように、回想法に関するコーディネーターの役割としては、事前にいろいろ学習しておく必要があるでしょう。学芸員もそういったことでは事前にいろいろと研究をしていたところです。

回想法の中ではリーダーとコリーダーというのがあって、サポートする人がいるとなおうまくいくということがあるのです。これはわれわれも予期せずして起こったことですが、施設の方々がうまくコリーダーとしてそれぞれの高齢者の状態に合わせて参加しやすいようにフォローしてくださっていたのです。これはやってみての経験でした。あらかじめそういうことがわれわれも分かってはいたのですが、そこまで施設の方に求めることはできなかったのです。自然にそういうことが起こったというのは、とてもありがたいことでした。

○呑海氏

ありがとうございます。自然発生的な例です。嶋田さんのところでは郷土資料館の民芸品を使っておられるということだったと思いますが、もう一つ回想法の紹介をしておきたいと思います。イギリスの例です。イギリスのノーフォーク図書館は回想法コレクションを構築しているのですが、今は 200 ぐらいあり、パッケージ化されています。例えば「子どもの頃の思い出」というパッケージで、透明なボックスにいろいろ昔のおもちゃやおもちゃの本、写真集など、手で触れられるようなものでパッケージをつくっていったり、クリスマスをテーマにオーナメントやクリスマスカード、クリスマスソングなどをパッケージ化しています。結婚式では、ブーケやベール、招待状などがパッケージ化されています。

この回想法キットは、OPAC で全て検索可能で、パッケージごと貸出もされていて、本と一緒の扱いなのです。キットの構成物は、寄贈されたり、オークションサイトなどで図書館のショップの取引で安く出ているものがあるらしいのですが、それで落札して図書館の人が組み合わせてパッケージをつくっているということでした。回想法キットには、これを家でどのように使うかという説明書も入っています。

貸し出すのも、もしかしたら重度の方へのアプローチとしてはいいのかなと思います。図書館は本を扱うところなので、なかなか物を扱うのは抵抗があるかもしれませんが、こちらの図書館はパッケージ化して、先ほどの汚損・破損の話ではないですが、中はそんなに厳密に管理する必要はないと考えています。一点物ではないので、なくなったらなくなったで良いということがあるかと思います。そういう意味では、気軽な形で資料を組み合わせながら回想法キットを作って貸し出すことができればと思います。

○嶋田氏

補足をよろしいでしょうか。回想法キットの話があったのですが、昨日少しご紹介した北名古屋市の民俗資料館の流れで、回想法センターというところがあり、ここが回想法のキットを貸し出しています。あとは、私がかつていた東近江市の能登川博物館も回想法キットを市民に向けて貸し出しています。

図書館がこういうことをするときに、「図書館にそういうコレクションがないから、すぐにはできない」と言われるのですが、どの自治体にも社会教育課に文化財保護の担当がいらっしゃると思うのです。そういった皆さんは一生懸命収集して保存しているのですが、活用する場面が意外とないのです。図書館としてはそういった皆さんの今までの仕事を活用する良い機会というアプローチで、それを提供してもらうように協力要請もしてはどうかと思います。

具体的に田原市も回想法をしておられるのですが、そういった部署との連携で、こういうものを持っていたらどうかというような、回想法における物品の選び方も学芸員と連携してやっているという話ですので、決して敷居の高いサービスではないと思います。面白そうだと思う皆さんは、ぜひ試していただければと思います。

○呑海氏

ありがとうございます。日本でも増えてきて、古くは出雲の図書館が早いと思うのですが、貸出は図書館の得意分野だと思います。かつ、蔵書検索システムで一緒に検索できるようになると、ますます利用する側の敷居は低くなると思います。1 点からでもいいので、始めるといいと思います。貴重なお話をありがとうございます。

では、次に江幡さんへのご質問です。まず「『絵本をよんであげますよ～』は開架室で実施しているのでしょうか。他の利用者から声がうるさいという苦情はありませんか」という質問です。

○江幡氏

市立図書館の場合、昨日もご説明したように、それほど広い場所ではなくて、児童書のコーナーは大人のエリアの 3 分の 1 ぐらいです。靴を脱いで上がっていく板張りの少し高い所があって、その場所で読むのです。壁際に本があって、一般の人たちが借りるためにあるスペースで行うのはとても不便なのですが、そこで 1 対 1 でやっているので、その子に聞こえるようにお話しするぐらいです。だから、閉じられた場所ではありません。子どもの貸出用の閲覧場所でやります。大きい声ではないので、苦情は特にありません。

土曜日に私たちは行なっているのですが、土日に特徴的なのはお父さんと一緒の子がものすごく多いことです。お母さんと二人だけよりも、お父さんと一緒がとても多いです。事情は分かりますよね。「お母さんは忙しいから、お父さんと一緒に図書館に行ってきて」という例がとても多いと思います。それで、お父さんが子どもに読み聞かせている例は結構あります。館内がもともと静かな所ではないですから、多少の声が出ても苦情が出ることは、私たちに関してはないです。図書館側がどうかは分かりませんが、私たちがやっているところで苦情があったことはありません。

○呑海氏

ありがとうございます。特に大学図書館ではラーニングコモンズという考え方があって、新しい学びの場として図書館を捉え直そうというものです。その特徴の一つとして、日本にかかわらず海外もそうなのですが、部屋がガラス張りであったり、オープンスペースであったりします。そういう学んでいる

姿やディスカッションしたり、小さなセミナーをしていたりするところをあえて見せて、そういうスタイルで学びを深めていくということがあるのです。こういった読み聞かせなども、どこかの部屋でやるのではなくて、図書館はこんなことをしているのだということを見せる場として、あえて場所を区切らなくても良いと思います。

○江幡氏

大勢の子どもたちに読み聞かせるおはなし会は、ちょっと閉じた場所の方が良いかもしれませんが、私たちは1対1で読むのが特徴なので、むしろその様子を周りから見てもらった方が良いのです。大抵子どもに読むときは、親が靴を脱がないで離れたところで様子を見ていたりします。それがとても大事だと思っています。閉じた所でする必要はないと思っています。

○呑海氏

ありがとうございます。むしろ擬似的なおばあちゃん、おじいちゃんと孫という大変すてきな取り組みだと思っています。

では次に、「図書館とつづき図書館ファン倶楽部の連携はどのようにされていますか」という質問です。

○江幡氏

昨日お話ししましたが、図書館と協働する記念事業からスタートして、最初から図書館と協働ですので、私たちが図書館と月に1回話し合うときには、初めはつづき図書館ファン倶楽部専用の担当職員が決まっていました。

しかし、6年ぐらい前から、都筑図書館だけではなくて、「都筑図書館から未来を考える共創の会(TMEK:ティーメック)」というグループをつくっていて、そこの会員は月1回やっていますが、会議をするときには必ず館長と職員が同席した場所で、私たちグループが一緒のテーブルに着きます。昨日お渡しした「協働の家系図」の中に、TMEKは何をするのかが書かれています。主に行っているのは、年に1回の図書館フェスタです。図書館のフェスティバルを年に1回やるために、1年前ぐらいから、いつやろうかという話し合いをします。それで、図書館という場所を使って「ライブラリーナイト」といって閉館後に音楽会とビブリオバトルをしているのです。2014年にそれが成功して、図書館という場所は音楽をやる上でとてもいい感じの場所だ、本の中で音楽を聴くのはとても気持ち良いということで続いています。それが主なTMEKと図書館の協働事業です。

担当した図書館の職員は、この行事のためにかなり労力を使うのです。2週間前にも終わったばかりなのですが、終わった後の反省で、これは私が言ったのですが、結局TMEKとはどういうことかというと、市民が一緒のテーブルに着いて、今年はこういった企画を立てると良い、こんなゲストを呼んでくると良いということを決めるのはその場ですが、チラシを作ったり、参加を募ったりする事務局的なことは図書館がやってくれていたのです。それが難なくできる担当者もいるのですが、今年はとても苦しそうだったのです。それで、「このやり方をやめましょう」と言いました。こういうやり方は協働になっていないから、担当するのは職員も含めて得手不得手で全て決めていくことにしました。

今までそれに気が付かなかったので、本当に協働になっていなかったと思うのですが、職員が決まったことをやらなければいけないと責任を持ってやってくれていて、それをそのまましているだけでは、良い内容になっていかないのです。だから、もっと協働のスタイルを柔軟にしていかないといけないと反省しています。横浜市内で都筑図書館だけ、区民活動対応の担当者がいるわけですから、数少ない10人のスタッフの中でそれに精力を注いでいると他のことに影響していくだろうと身にしみて感じたので、私たち市民側ももっと工夫しなくてはいけないと思っています。

○呑海氏

ありがとうございます。より自立的な活動をされている印象がすごくあります。私は活動に大変感銘を受けて何回か、お話を伺いに行ったことがあります。一番驚いたのが、図書館のイベントを考えるの

にみんなでアイデアを出し合おうというディスカッションの場に参加したことがあったのですが、ファン倶楽部の方と図書館の方、館長もフラットに交えて、みんなに付箋が配られるのです。「三つぐらいはアイデアを書いてください」と言われて、私もそれを拝見しているだけかと思ったら、私にも付箋を配られて「書いてください」と言われたので書きました。

そして、ファン倶楽部の方に「出してください」と言われて、ホワイトボードに「これはこの場所でできる」、「これはこういうサービスのカテゴリーだ」というふうに、その場でホワイトボードに貼って分類されて、「これはこのイベントですぐできるね」、「これはこういう準備が要るね」というふうに話し合われていきます。そうしたら、ある職員の方が１つの付箋にアイデアを２つ、３つ書いていたのです。すると、ファン倶楽部の方が「さっき、付箋１つについて１つのアイデアと言いましたよね」、「すみません」というふうに直されている場面を目の当たりにして、全くフラットに一緒の場で話し合ってイベントを築き上げているということで、本当に自立的に活動されているというのが印象的でした。

○江幡氏

決めるまでは本当にフラットなのに、実際に人を集めたり、広報をしたりするのは図書館です。私たちは、図書館がそこをできるから良いと思って関わっているのですが、それが必要以上に負担になるようなことは本意ではないのです。決まるところに市民が関わっているのは一つの大きな柱だと思っていますが、実際に展開するところを市民も一緒にシェアしながら進めなければいけないと思っています。図書館が最低限することは何かということを絞っていかないと、図書館側の負担になるということを私たちも考えないといけません。

しかし、私たちファン倶楽部自体もそれほど人数がいるわけではないので、できる人を新たに連れてくれば良いではないかと思います。行き詰まると必ず方法は見つかるもので、行き詰まっても気付くことはとても大事だと思います。だから、この方法は良くないということで、来年はどうするかというのを、A4 用紙１ページにみんな意見を出して集めることということになりました。

○呑海氏

ありがとうございます。図書館の立場として、嶋田さんは市民との協働の点に大変力を入れられていると思うのですが、いかがですか。

○嶋田氏

今のお話は本当にそうだそうだと心の中で思いつつ、われわれのところも「図書館友の会」が去年１月にできて、伊万里市民図書館友の会である「図書館フレンズいまり」を一つのモデルにして、市民有志の方々がやってくださっています。その中で「教育と提言」を会の目的にしています。そのまま伊万里市のものをいただいたようなものなのですが、江幡さんがおっしゃったように、皆さんはあくまでも図書館に協力する立場であり、でもフラットに言うべきことは言うということです。

それぞれ思いがあって、こんなことをしたい、あんなことをしたいと本当に純粋に図書館にぶつけていただいています。われわれもそれに応えたいと思うので、一生懸命コラボレーションするのですが、どこかで図書館が、気が付いてみれば行事が立て込み過ぎて PR も大変というのもあって、友の会の皆さんにそういう意味での年間を通しての計画性やアイデアの玉出しをしていくときに、狙いや効果的な時期などの観点で一緒に考えることをそろそろお話ししていきたいと思っていたところです。今のお話は本当にそうで、こういうことも図書館として市民の皆さんときちんと向き合いながら言わなければならないと強く感じました。

○江幡氏

都筑図書館はとても控えめなので、私たちに要望はしないのです。だから、私たちが気付かないといけないと思うのです。嶋田さんのように本当に素晴らしい館長がいらっしゃると、「こうしてください」ときっとおっしゃると思うのですが、横浜の図書館

長に決まる方は、図書館にずっと興味があって館長になっている方が就くわけではありません。全く違う部署からやって来る図書館長なので、市民にどういうことを聞けばいいかということまで気付くのはなかなか難しいのです。5 周年記念事業をスタートしたころですが、市政推進課にいて、まちづくりの手法をよく知った課長が館長になって、見事な市民巻き込み型の事業をしたのです。市民活動や地域活動に関わった方がたまたま館長になると、そうしたこともありますが、その後 18 年間、市民との協働ということに慣れている方はいらっしゃいません。

○呑海氏

ありがとうございます。では、次に進みたいと思います。「ボランティアの入会減少や人数が少なくなっていることで、会の存続について課題や問題を感じることがありますか」。あるいは、ファン倶楽部や JiJi・BaBa 隊の会員の集め方についての質問です。

○江幡氏

これも「協働の家系図」の中に答えがあります。親の代、子の代、孫の代とあって、それぞれの親の代が元気にやれた時代のこと、最初の方にあるのは元気があってやれていた事業です。いろいろな講座をしたり、他の団体と手を組んだりしてできました。私は最初から関わっている人間ですが、今の約 20 名の中で最初から関わっている人は 5～6 人ぐらいになっています。今の代表も最初から関わっていた人ではありません。幸いに今の代表は新しく加わったけれど、力を持っている人です。ご覧のように子どもというのは、自分たち自身も子どもの時代、つづきっこ読書応援団のところにも関わっているので、実践するのはつづきっこ読書応援団や JiJi・BaBa 隊といったところで自分たちも関わっているのです。ですから、つづき図書館ファン倶楽部は本当にシンプルな組織にせざるを得なくなりました。

月に 1 回集まって、今は通信を印刷屋に出すようになって、きれいな印刷物になったのですが、その前はリソグラフで印刷していました。私たちは年間会費を 1 口 1000 円で集めていて、それだけで賄っているので、予算に制限があるため、通信をどういうふうに出すかというのがまず大きな議題です。それから、いろいろな団体の情報を交換するような定例会をきちんと持つことと、TMEK、図書館と協働するところに参加することが、図書館ファン倶楽部の主な活動になっています。それ以外はほとんど、つづき図書館ファン倶楽部自体で忙しいことはないです。すごくスリムにしていけば、これからも続いていくと思います。

一方で活動の幅が広がっていくのは、つづきっこ読書応援団です。区内全域で、ご覧のように学校部会や、勉強部会、「わらべうたわらしっこの会」や絵本勉強会、それから企画部会ではよそと一緒に勉強するところに参加したりしています。JiJi・BaBa 隊というのは本当に実践部隊ですが、そういうところが忙しくなっているのは成長しているからだと思います。ですから、図書館ファン倶楽部自体が細くなっていくことは心配ですが、それほど心配していません。ただ、この中に人が加わってくるのはとても難しい。すごく高度な感じがします。私たちと同じように行動が取れる人たちは細くなっていくかもしれませんが、そういう形でしばらくは存続していくと思います。

○嶋田氏

昨日、終わってから江幡さんの今のお話で気付かされたことがあったのです。われわれ図書館友の会

の皆さんもどんどん高齢化しているから若手を増やさなければなりません。もちろんそういうふうに多世代でやることは重要だし、事業承継という意味で中堅というか、若い人たちが入ってきているのですが、日本の人口がどんどん高齢化していくのだから活動する主体が高齢化するのはしょうがないというか当たり前で、何が悪いのかということです。それこそ高齢化することをネガティブなイメージで私たちは捉えていたのです。なので、「高齢化上等」を一つの文句にしています。また、JiJi・BaBa というネーミングがいいですね。イメージがすごく一新しました。

○江幡氏

どなたかがおっしゃっていたのですが、人間は最期までいきいき楽しく人生を送りたいですよね。確かに認知症は一つの症状で、多分人生の後半に出てくる、もしかしたら誰でも出てくるのかもしれませんが、いわば高齢の時代はとても長いわけです。そこを豊かに暮らすことはとても大事なことだと思います。それを意識することです。私は、本当に高齢は上等だと思うのです。何て魅力的な人がいっぱいいるのだろうと毎回感動するのです。JiJi・BaBa 隊の定例会も本当に大好きです。定例会では、どこに誰が行くかという手配をしますが、後半は今までやってきた活動を必ず報告し合うのです。その報告内容が素晴らしくて、その人たちがその場所に行ってどんなことをしたか、そこでどんな出会いがあったか、どんな人がどういう反応をしたかというのをとても楽しく話してくれます。

それが価値だと思うのです。それはもしかしたら、高齢となったわれわれの年代だから感じられる感性かもしれないし、自分の感性から新しく生まれてくる可能性かもしれませんが、そういうものをすごく感じる場なのです。若い皆さまにはなかなかそういう気を配れないかもしれないと思いますが、年を取って上等という場をたくさんつくっていく必要があります。それは、昨日も申しましたが、趣味の集まりに行くだけではないのです。案外、趣味を奨励してはいますが、ボランティアという表現も何か固定されたイメージが強いからもっと違うイメージの言葉があると良いと思いますが、面白い世代に入っているということです。「この年頃は面白いよ」というのを PR していくと、人が集まってくると思うのです。そういういい友達をたくさん作ってほしいと思います。

自分たちの世代にはないけど、これはなかなか面白いと思う人がきっといるはずです。その人たちの可能性、その時点ではなくそこから広がっていく可能性を持っている人たちですから、そこを見つけ出してもらうと、いわばボランティアの担い手なども決して悲観的ではないと思います。図書館が困っていることを下請けでやってくれる人たちとは思わないでください。図書館は、みんながいきいきと暮らしていくための手助けをする場所です。そこに喜びを感じてほしいと思います。図書館はそういう場所でしょう。みんなが人生を送っていく上で、本を通してエールを送っていく場所です。そんな人たちがいきいきしていくためにどんな助けが必要かという発想で考えていくと、仕事もすごく楽しくなっていくと思います。ちょっと生意気ですが、そんなことを感じました。

○呑海氏

大変素晴らしい図書館へのメッセージをありがとうございます。おっしゃったことは本当にそうで、高齢化というとネガティブに捉えがちな傾向がある場面もあります。また、高齢者サービスを考えるときに高齢者の方ができないことを数えてサービスをする傾向にあるようにも思います。でも、高齢者の方ができること、得意とされているところに目を向けて連携していくことが大事だと思います。

いろいろな年代の方が会場にいらっしゃると思いますが、年を重ねていかがですか。私は年を重ねてすごく生きやすくなっています。体力は落ちていますし、お酒も飲めなくなっていますが。どうでしょうか。

○江幡氏

本当にそう思います。体力は衰えていくばかりで

すが、気持ちはどんどん高まっているのかもしれません。多分、人間はそういう脳の行動だと思います。楽しいことやわくわくすることを見つけたら、その部分が成長するのだと思います。死ぬまでずっとそうだと思います。

○呑海氏

ありがとうございます。昨日、「超高齢社会と図書館～生きがいづくりから認知症支援まで～」という国立国会図書館の報告書をご紹介しました。高齢者へのインタビュー調査の結果をご紹介しましたが、実はその 7 章はケーススタディで、超高齢社会における図書館サービスということで 3 つのケースを挙げています。コンセプトは 3 つで、「高齢者が活躍する場としての図書館」、「図書館からアプローチする認知症支援」、「福祉行政からの取り組み支援」ということで高齢者が活躍する場としての図書館に、つづき図書館ファン倶楽部を挙げています。実際にお話を伺い、こちらでまとめています。こちらも併せて読んでいただければうれしいです。その節はお世話になりました。ありがとうございます。

では、次に岩城さんへのご質問です。「ブックリストの仕上がりが非常に美しいと思いました。助成金などの補助があるのでしょうか。いくらで製作されているのでしょうか」。

○岩城氏

ブックリストの仕上がりが美しいとお褒めの言葉をいただき、大変うれしく思います。全て職員の手作りで、Word で作っています。先ほど得手不得手という話がありましたが、選書に関しては児童書に詳しい職員がどの館にも 3 人はいますので、問題ありません。それぞれの館で参加する層に合わせて、低学年が多いのか、高学年が多いのかということも合わせて、各館でどのような形のブックリストにするかはそれぞれ任せています。

レイアウトが苦手という人もいるかもしれませんが、他の行事で使ったレイアウトをそのまま、ベースをあまり変えずに、認知症だったらオレンジのロバを入れたりして、ささっと作っています。助成金などの補助があればいいのですが、何もありません。少ない消耗品の中で、職員ができるだけカラートナーを使わないようにしながら、資料を使いながら図書館で印刷しています。部数も、この行事だと定員が 15 名ぐらいになっているので、20～30 部ぐらい印刷して、当日に渡して、残った分は特設コーナーに置く形で、毎回の行事のときにブックリストを付けるようにしています。昨年度の大雪の影響もあり、特に福井市は財政難に入っているのですが、そういうブックリストは、小さいリストですが学校に行くときも持っていって、何カ月も後に思い出して来てくれた人もいるので、できるだけここは削らずに作るようにしています。

○呑海氏

ありがとうございます。持ってきていただいた絵本で、私自身も聞かれたりしたのですが、どういうふうに選んだり、どういう内容がお薦めというのがもしあれば、絵本の紹介とともにお願いできればと思います。

○岩城氏

絵本の形をしていても大人向けの絵本もあるのです。特に日常というテーマでおじいちゃん、おばあちゃんが出てくる本を見ていると、おじいちゃん、

おばあちゃんが死んでしまうような本がたくさんあります。でも、本当に一番伝えたいところが伝わるような内容の絵本を選んで紹介しています。特設コーナーの中にはその他の本を入れたりしますが、子どもに紹介するときは子どもの目線で、大人に紹介するときは大人の目線でということに気を付けています。

○呑海氏

ありがとうございます。その他、「認知症サポーターやキャラバン・メイトとはどういうものですか」というご質問をいただきました。情報交換会でキャラバン・メイトですという方に出会いましたので、その方にお話を急きょお願いしました。新潟県立図書館の速水さんです。

○速水氏

ご指名いただき、恐縮です。新潟県立図書館の速水と申します。私が認知症キャラバン・メイトだったのが7年前ぐらいで、古い話になって恐縮です。

認知症サポーターというものがあります。これは、その方自体が認知症について特別な何かをするわけではないのですが、認知症についての知識を深めて、認知症の本人や家族の方を優しく温かく見守るという講座を受けた方が認知症サポーターになります。その方に対して、認知症とはこういうものです、こういう病気の症状が出ます、こういう心構えでいてくださいという形で講義を行う方が認知症のキャラバン・メイトになっています。キャラバン・メイトは、大体1日6時間ぐらいの講習を受けるとなれます。地域包括支援センターの職員、福祉行政の担当職員、介護実務に当たっている方の中で、実践リーダー研修という、ある程度専門性のあるものを受講している方などがなれます。

認知症サポーターは、誰でもなることができます。大体講座は1時間半ぐらいです。昨日、福井市の方で劇を見たりしていましたが、劇によって認知症の方はこういうふうに行動して、こういうふうにした方がいいというお話をします。昨日、イソギンチャクの例で出てきましたが、認知症の人の記憶と物忘れのことについて1時間半学びます。ご存じの方もいるかもしれませんが、このようなオレンジのリングやロバ隊長のシールをもらえて、それを個人で持っていたり、お店、郵便局や銀行で、「うちの銀行や郵便局では認知症の方に対してこういう理解を示す職員がいます、認知症サポーターがいます」という形でアピールしているところもあります。

○呑海氏

突然のお願いだったにもかかわらず、大変分かりやすい説明をありがとうございます。見せていただいたオレンジリングは、着けている方がいらっしゃると、認知症の方やご家族の方が安心して接することができるということもありますし、ロバ隊長のステッカーなども、図書館に貼っておられるところもあります。

認知症の方やご家族の方とお話ししていると、「認知症になっても図書館に行っていいですか」とか「私のお父さんは認知症ですけど、図書館に連れていっても迷惑ではないですか」という声をたくさん伺います。そういったときに、図書館は全ての人に開かれているものですから、「もちろんです」と言います。そういう戸惑いを持っておられることを考えると、ウエルカムという意思表示としてオレンジリングを着けたり、あるいはステッカーを貼ったりすることは大変有効だと思います。

また最近は、図書館員が講習を受けて認知症サポーターになるケースも増えている一方で、図書館で認知症サポーターの講習会をするところも増えています。そういう意味で図書館は貢献できると思います。図書館で講習会をすると、より敷居が低く、いろいろな人が参加するという声も聞きますので、図書館で実施する価値はあると思います。それぞれの地域包括ケア推進室や福祉行政の方とコンタクトを取ると、多分すぐ講習会などをしてくださると思うので、まだのところは十分お考えいただければと思います。速水さん、ありがとうございました。

では次に、私へいただいた質問です。「AIとシンギュラリティと図書館についてもう少し詳しく」という質問がありました。昨日、中国のAIアナウンサー

の動画を見たのですが、シンギュラリティとは、こうしたグラフで表されることが多いのです。2045年には1台のPCが全人類の能力を超えるといわれているところです。

こちらは、「インテリジェント化が加速するICTの未来像に関する研究会」の報告書です。シンギュラリティというお話をしましたが、AIが与える影響で、人間の知性を超えることによって起こる生活上の変化として、チェスのゲームでは何年も前に人間が負かされたというのがあったと思います。そういった特異点という意味でシンギュラリティという言葉が最近聞かれるようになってきたと思います。

この延長線上で、野村総研の試算から、日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能というお話をしました。この話は遠い未来のことではなくて、10～20年後に日本で起こるといわれているもので、601 種類の職業が代替可能な順で並べられています。そして、人工知能等で代替が難しい傾向にある職業と代替可能な職業の傾向がこの報告書の中で論じられています。代替が難しいのは、抽象的な概念を整理・創出するための知識が要求される職業、他者との協調や他者の理解・説得・ネゴシエーション・サービス指向性が求められる職業が挙げられています。図書館に引きつけて言うと、2番目のサービス指向性が求められるところだと思います。

一方で、人工知能等で代替できる可能性が高い傾向にある職業は、必ずしも特別の知識・スキルが求められない職業、データの分析や秩序的・体系的操作が求められる職業、単純なルーティンワークがここに入ると思います。

ここでは職業となっていますが、図書館業務はこの両方が入っていると思います。他者との協調やサービスという点では、読書というのは心を届ける行為だと思うのですが、そういったところは代替不可能であるといえると思います。

AIが入ってきたときにどれが代替可能で、どれが代替可能ではないのかというのは一度区分けしてみて、人的リソースを代替不可能なところに注力するのが選択の一つとしてあるのではないかという意味でお話ししました。これは、AIだからドラスティックに変わる面もあるのですが、例えば図書館はICT化が進むのが早い領域だと思います。さまざまな機械も入っていると思います。

例えばシンガポールの話をすると、シンガポールは「ライブラリー2000」というレポートを1990年代後半に出しました。そのときに、シンガポールは自然のリソースが少ないので、人的リソースをいかに有効活用するかというところに政府が大きく舵を切って久しいのです。その中の一つに図書館が挙げられています。図書館を人的リソースの質を高める社会的装置として捉えるということで、図書館に対して大きな改革を行いました。

何を行ったかというと、図書館員全てがレファレンスをできるようにしました。そして、全ての図書館に貸出機を導入しました。カウンターでは一切貸出は行いません。図書館員からは大変反発がありました。また、小さい子どもや高齢者が使いこなせないのではないかという声もありました。でも、国の方針としてやりました。

そして、図書館員は若い人も年を取った人も、全て一からレファレンスの研修を受けさせられます。私も幸運なことに、その研修を受けさせていただいたのです。本当に20歳そこそこの人から定年間際の方まで一緒に、レファレンスインタビューの方法から習うのです。例えばパーソナルステージの話です。アジア人はほどほどにパーソナルステージ、近くで話さないと疎外感を感じますが、アメリカ人だと近い方が失礼に当たります。そこから話を受けて、定年間際のライブラリアンの方にお話を聞いたら、「私はあと数年で定年なのに、なぜ今から仕事を変わらないといけないのか」とおっしゃっていました。それでレファレンスにシフトされたということです。これは別にAIではなく、ICT技術の導入で大きく政策を変えた一つの例だと思います。

もう一つ言いたいことは、地続きなものが地続きでなくなるかもしれないという表現をしますが、言い方を変えればこれまでの常識が通用しない事態が起こるのではないかと思っています。そういったところを見越して、人の配置であったり、どういうスキルを伸ばすか、あるいは図書館は何ができるのか

ということを、今一度考え直してはどうかということです。これでお答えに替えさせていただきたいと思います。

その他にいただいた質問としては、全国の公共図書館の来館者が減少している理由についてです。これは、さまざまに言われていると思います。もちろん活字離れもあるでしょうし、読書に割く時間がそもそもなくなったということもあるでしょうし、一方で滞在型の図書館も増えてきて、来館者数を増やしているところがあったり、図書館が新しく建ったら一時的には増えるけど、また下がっていく傾向があるとも聞いています。

その一方で、着実に全ての数字を右肩上がりにしている図書館もあります。入館者数も、貸出冊数も、レファレンス件数も全てです。それは横浜市の港北図書館です。港北図書館では木下豊館長が仕掛け人として動かれているので、それが実現できているのではないかと思います。木下館長は館長に就任されてから、まず図書館の中で何かをするというよりは、図書館の外へ出ていきます。そして、図書館のことをお話しするとともに、図書館で何かできることがないかということを模索して、どんどん区民を巻き込む形でサービスを提供しています。それがうまく正のスパイラルになってきたのではないかと思います。大変パワフルな館長で、ご自身で「顔も声もでかい」とおっしゃっていますが、まさしくそんな感じです。結構取材も受けられていて、「木下豊」と入れると顔写真も見られると思います。木下館長の試みを伺って、まさしく新しい時代の図書館サービスだと感じたので、少しご紹介していこうと思います。

ここに新しい図書館サービスモデルと書いていますが、主にカナダとイギリスで起こっている新しい考え方です。イギリスでは「Needs Based Library」という言葉が使われていて、カナダでは「Community-Led Library」という言葉が使われています。言葉は違いますが、内容はほぼ一緒です。私たちはCommunity-Led Library を「コミュニティ主導型図書館サービス」と訳しています。これは何かというと、図書館のサービス対象のところで、図書館に来ない方に対する調査や手立てを何かしていますか。もしされていたら教えていただきたいのですが、図書館に来ない人はどうして図書館に来ないのだろうという素朴な疑問から立ち上がったプロジェクトなのです。

まず、真ん中にあるように、社会的に阻害されているコミュニティが協働するコミュニティ主導型の図書館サービスモデルを提唱されたわけです。社会的に阻害されているコミュニティの人たちが図書館を利用しないのではないかとういうことです。移民、難民、貧困層、メンタルヘルス、あるいは危機にあるメンタルヘルスを抱える若者や高齢者もここに入っています。こういったところでmarginal という言葉を使っていたのです。周辺的な人々への図書館サービスです。いろいろとインタビュー調査に行った結果、その人たちがそもそもmarginal と言っていること自体、上から目線だし、周辺の人に手を差し伸べていて、同等の立場ではないことを図書館の方が気が付いて、この名称はまずいだろうということで次に立ち上がったのが Working Together Project です。これは一緒に働こうという、まさしくフラットな感じで構想されたプロジェクトです。

どういうふうに進められるかというと、図書館に来ない方に図書館ニーズを聞くときはどんな手段があると思いますか。例えば図書館に来てもらって、「図書館に何かしてほしいことはありますか」とか、図書館に来ていただくのは呼びつけるような感じになると思ったら、その方がいらっしゃるところに行って「図書館に何かしてほしいことはありますか」と聞くのが図書館ニーズに関する調査だと思いがちなのですが、実はほとんど図書館に来たことがない人は、図書館で何ができるかということすら分かりません。その方に「何をしてほしいですか」と聞いても、出てこないに決まっています。その調査結果として、そういった方はニーズを持っていないという結果を出すのは間違いだというのは想像に難くないと思います。

では、この人たちが何をしたかというと、コミュニティ・ディベロップメントという手法があるそうです。コミュニティの中に入っていって、行動、時間を共にして、分かっている人たちがその人たちのニ

ーズを掘り出す手法です。何をしたかというと、コミュニティ・ディベロップメント・ライブラリアンです。この間行ったらコミュニティ・ライブラリアンと名前が変わっていましたが、そういう人を置きます。その人たちは何をするかというと、図書館員だから当然図書館に出勤してくると思いきや、図書館に出勤するのではなくて、普段はコミュニティに行っています。そこで一緒に過ごして、図書館のニーズをその人が感じ取って、それを図書館にフィードバックする役割です。まさしく木下館長はコミュニティに出ていって、ニーズをくみ取って持ち帰ってきて、実際にサービスを展開する形でされているので、大変感銘を受けたのです。こういった手法は今後もしかしたら必要な手法ではないかと思います。

図書館の利用者が減るのはもちろんいろいろな要因があると思います。一方で、ほとんど図書館に来ない人がどうして来ないのかというところにアプローチしていくのも、誰にでも開かれた図書館としては重要なテーマだと思っています。そういった意味では江幡さんの活動もまさしくコミュニティ主導型図書館サービスだと思います。

○江幡氏

昨日、ビニールの袋に入っていたものです。これはご覧になりましたか。「ひと・まち・本をつなげ、走らせよう！　つづきブックカフェ」です。見てくださった方は手を挙げてください。ありがとうございます。これは、進行中です。私の最初の活動として、去年 1 月に自分の団地の一室に文庫を開いたのです。子どもたちに本を読んでもらいたくて文庫を開いたのです。子どもたちが少なくなっていることもありますが、月に 2 回開いていても、子どもたちが来ません。では、子どものいる所に本を積んで行けばいいではないかというのが、個人的な最初の発想だったのです。

その背景には、図書館がそういった考えを持っているということはもちろんありますが、直接のきっかけは、わが家にある本を積んで持っていきたいということです。そして、そう言うと面白いではないかという仲間たちが集まって、本を積む車も、小田原の川田さんという方が丸ごとオレンジ色のキャンピングカーを全く無償で、保険も自分が入っているから、使うのは年に数日だから、あとは貸してあげるという奇跡が起こったのです。それで、本を積んで子どもたちがいる所、子どもたちが集まってきそうな所、子どもたちだけではなくて、団地に行ったらどんな人たちが集まってくるだろうということで、未知数ではあるのですが、そこに行って 3 時間止まって、ゆっくりするにはちょっとした飲み物と甘い物が絶対必要だと思って、カフェという名前にしているのはそういうわけです。そのようにして、このプロジェクトが始まりました。

皆さんも日頃、こんなに本があるのになぜみんな利用しに来ないのだろうと感じていると思います。瀬戸内市の嶋田さんのところには素晴らしい車があって、施設に本を持って行くことができます。移動する手段はいろいろな方法で考えるといいと思います。

行政レベルでは移動図書館などいろいろやっていますが、市民レベルでこの動きが始まっていくと結構面白いことになるのではないかと思ってのスタートです。どうやら全国的にもあまりないようなのです。全国のことをご存じの岡本真さんが、「これは日本を変えていく新しい風だ」というエールを送ってくださっていますが、何のことはない、小さなものです。3 時間しか止まっていませんから、ちょっとした雑誌や料理の本も載せるつもりですが、主体は絵本でいいと思っています。本もせいぜい 300 冊ぐらいでいいと思います。あとはおしゃべりしながらゆっくりしたいということなのです。

このプロジェクトを成功させるため、クラウドファンディングに挑戦中です。QR コードを開けてみると、私たちの思いが切々と訴えてあるので、よろしかったら皆さま、クラウドファンディングにご協力ください。

○呑海氏

ありがとうございます。全く回し者ではありませんが、ネット上からでも、江幡さんに直接手渡してでも受け付けていただけるということです。

○江幡氏

現金手渡し用の袋も用意しています。よろしかったら、お願いいたします。

○呑海氏

ありがとうございました。ネットで検索するとすぐ出てきます。

○江幡氏

ファーストステージが12月6日で、それが100万円目標です。最終目標は、借りた車ではなくて自前の車を持ちたいので240万円です。今、ファーストステージにまだ行っていません。あと1万～2万円ぐらい必要です。私が預かった現金を入れるとすぐに達成するのではないかと思います。本当にご協力ありがとうございました。

○呑海氏

ありがとうございます。そういうのに参加させていただくと思うと、こちらもわくわくするような思いがあります。「こういった活動はどんどん打ち出されているのですが、江幡さんのような方とはどこで会えるのですか」という質問を図書館の方から頂きました。先ほどのコミュニティ・ライブラリアンの話で、カナダのトロントでは徹底的にサービス対象の地域を分析しています。例えば高齢化率であったり、年齢、人口、男女別などを分析しているのです。いろいろマッピングして、例えば高齢者施設は図書館からどれぐらい離れているとか、学校はどれぐらい離れているとか、全てマッピングはこんな感じでされています。

もう一つ特徴的なのは、コミュニティで活動しているグループはものすごくたくさんあると思いますが、それを徹底的に調べ上げて、そのコンタクトパーソンにアプローチして、どんな活動をしているかのを全て表にしているのです。実は港北図書館の木下館長も全くご存じなくて、自らされていて私は仰天しました。これは例えばアート＆カルチャーに分類されていて、この領域だとこういう団体があって、こういう人たちがいるというリストを作っておくと、何かイベントをしようというときに、この人に声を掛ければ人が集まるとか、その人たちと一緒に何かできないかというアプローチができます。コミュニティを知るところも、こういった活動をされているところと連携する第一歩として、どこがどんなふうに何をされているか、コンタクトパーソンは誰なのか、実はコンタクトパーソンがものすごく重要だと思っています。そういった人と人とのつながりをつくっておくのも一つの手段としてあると思いました。

では、最後の質問です。最後に私が、図書館側は変えるところと変えないところを考えて、変えてもいいところはドラスティックにという話をしました。それについて、「(どうするかということは) 図書館員が考えることとして、利用者の方とそれがずれていたらどうしたらいいですか。例えば、こんなものは図書館ではないという声があったらどうしたらいいですか」という質問がありました。これは、図書館は図書館の人が話すのが一番いいと思っています。こういうふうに申し上げると、図書館プロパーで何十年もずっとしてきた方と、異動で全然違う領域から図書館に来られた方、それも望んでいた方と不本意ながら図書館に異動された方がいらっしゃると思います。いろいろあると思いますが、利用者から見ると、その人がどんな経緯で図書館にいらっしゃるかは全く分からないわけです。同じく図書館の人なので、やはり図書館にお勤めになった際には、ぜひ図書館の意義からお話しできる状態になると良いと思っています。

エレベータートークは聞いたことがありますか。短い時間で聞かれたことに即座に答えるような感じです。エレベーターは誰もが乗り合わせます。例えばとても大きな図書館で、年に1回ぐらいしか館長に会えないようなところや、あるいは大きな会社で社長に年に1回しか会えないような感じのところでも、エレベーターは誰もが乗るところなので、例えば「最近、君はどうかね」と言われたときに「こういうところが課題です」とすぐに伝えることができると、もしかしたらその道付けができるかもしれないという文脈で使われたりします。そんな感じで、例えば「図書館は無料貸本屋ですね」と言われたとき

に、「いえいえ」という話ができるようになっておくのは重要かと思います。

では、図書館は何なのかという話ですが、基本に立ち戻るということだと思います。図書館は何なのかというのは、あまり堅苦しい話は好きではなくて、大上段に構えるのは好きではないのですが、例えば「図書館の自由に関する宣言」で、「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することを、もっとも重要な任務とする」と第1条に書かれています。これに尽きると思います。これをきちんと説明できれば、無料貸本屋論争に終止符を打つことができると思うほどです。こういった図書館の役割を相手に嫌がられないように即座に話すことができればと思います。これは掘っていくと、下手するとうさんくささが付きまとうように思うので、うまく説明することが必要かと思います。

これでご質問に全て答えたと思います。初めに皆さんにお願いしていたように、ここに座っておられる皆さま方の中にも高齢者サービスあるいは認知症に関する素晴らしい取り組み、素晴らしいというとハードルを上げるので、ささやかな取り組みなどもご紹介いただければと思います。会場の皆さま、いかがでしょうか。例えば、これは高齢者サービスかなと思うものでもいいと思うのです。今されているサービスが、少し見方を変えるだけで高齢者サービスになるということもあるので、何か皆さま方から取り組みをご紹介していただければと思います。

○江上氏

基山町立図書館の江上といいます。今日は貴重なお話をいただいて、研修に参加して本当に良かったと思っています。

当館では現在高齢者サービスとして大したことは行えていません。そのため他館の事例を学びに今日はこちらに来たのですが、せっかくの機会ですのであえてハードルを下げるために一言だけお伝えします。当館では、地元の高齢者の方が世間話をよくされます。話を聞くのに職員があまり時間を割くということは経営コストから考えるとどうなのかということもあると思いますが、私は平日はなるべく利用者の話を聞くようにしています。その中でお薦めの本などの話もすることもありますが、中には今日は誰とも会っていない、図書館ではじめて人と話したと言われる方もおられます。本当に小さな図書館で大した取組みはできていませんが、研修のお話を聞いていて、高齢者サービスはまずそこからがスタートしていくものだと思いました。そうして小さな積み重ねから図書館のファンを増やしていければと思っています。中身のない内容で、発言のハードルを下げるためでいっている感じでお恥ずかしいのですが、これから利用者の方が図書館で楽しい時間になるように、まず会話から始めたいと思いました。そういった取組みからでも良いのだと感じました。ありがとうございました。

○呑海氏

素晴らしいと思います。なかなかできません。ある図書館の方がおっしゃっていたのですが、毎朝10時に来て、カウンターの若い職員に文句を言う高齢者の方がいらっしゃって、きっちり10時に来られて1時間責めるのです。すると、その職員が精神的に病んでしまって、「10 時にカウンターに座るのが嫌です」となってしまうぐらい追い詰められました。でも、「来ないでください。うちの職員が病気になりました」と言うわけにもいきません。そこで、姿勢を変えて、傾聴スキルのある職員が一度じっくり話を聞くことになりました。そうすると、その方がいつも文句を言われるのは本当に些細なことなのです。例えば本の上が汚れていたとか、自分の読みたい本がちゃんとしたところにないなどです。でも、話を聞くと、話したかった、そのきっかけが欲しかったといいます。

じっくり聞いてみると、その方はとても歴史に造詣が深いことが分かりました。お話を聞いているうちに知識をすごくお持ちであると分かったので、「図書館でこういう歴史系のイベントをするのですが、そこでお話をしてもらえませんか」と持ちかけると、「私でいいのですか」という話になって、講演会というよりはその方が資料を並べて説明するという、

小さなイベントだったのですが、そういうことをしたら次の日から図書館のファンになられて、「図書館の応援団が 1 人増えた」とおっしゃっていました。その人も何か図書館でやりたいということで、その人の行動が変わったこともあるので、じっくり話を聞くことはとても重要で、それこそもしかしたらその人の人生を変えるかもしれないことだと思っています。大変貴重なお話をありがとうございます。他にいかがでしょうか。

○葉山氏

神奈川県座間市立図書館の葉山と申します。うちでやっている事例ですが、公民館がもう二十数年、高齢者大学を行っていて、そこで調べ学習を始めたのです。図書館と連携して、この 10 年間ぐらいずっと大人のための調べ学習講座として、公民館の高齢者大学のコマの中に図書館の調べ学習を入れ込んでいます。それだと図書館の話を聞くだけで終わってしまうので、調べ学習の作品作りに取り組んでいます。

子ども向けの調べ学習もしているのですが、高齢者の方はいろいろな背景を持っていらっしゃるので、電車のことを調べても、地域のことを調べても、自分のふるさとのことを調べても、その奥には膨大な知識があって、紙に書かれたものの 10 倍ぐらいのいろいろなお話を聞けて、作品自体も素晴らしいものができます。

発表会のときには、子どもも大人も調べ学習の作品を作った人が全員並んで発表する形になるのですが、子どもと張り合いながら、でも子どもとは違う奥の深さを感じられる報告会をしています。そういった形で高齢者の方が家で調べ学習をすることが、子どもや孫たちに背中を見せることになり、おじいちゃんが書いているのだというふうに見せられることもいいのではないかと思って取り組んでいます。

○呑海氏

本当にありがとうございます。そういう意味では「大人のための調べ学習」というタイトルもいいです。子どもと張り合いながらというところもいいと思います。高齢者サービスはごく一部ではあるのですが、子どものためのサービスと関わってきます。例えば読み聞かせは共通するところがあると思います。そういった意味で、岩城さん、子どものためのサービスを何か高齢者に応用できるようなアイデアがもしあれば教えてください。

○岩城氏

思い付きのままでいいですか。

○呑海氏

もちろんです。

○岩城氏

私は子ども向けの行事ばかりしているのですが、「さいころでおはなし」という行事をしたことがあります。何も書いていないさいころに子どもたちがリンゴやクマ、お化け、宇宙人などの好きな絵を描いて、それをさいころに貼ります。ころころと転がして、最初は 1 個か 2 個のさいころで始めるのですが、3～4 個と増やしていって、出てきた絵をどんな順番でもいいからつないでお話をつくって発表するのです。先ほどの回想法のように、用意するものを高齢者が親しみのあるものに変えて、さいころでなくてもいいのですが、そういうのをちょっと提示することで高齢者のお話を聞くことができると思いました。

○呑海氏

ありがとうございます。すてきなアイデアだと思います。そういうのを高齢者の方と一緒にやるのもいいかもしれません。これもカナダの例になりますが、高齢者の方にスマートフォンの使い方や、デジカメで撮ってそれを SNS に上げたりするスキルを身に付ける講習会が図書館でされているのです。ある図書館では、高校生と高齢者を 1 対 1 でペアリングして 3 カ月間、高校生が高齢者に使い方を週 1 回教えるというのを行っているところがあります。高校生は高齢者に対して礼儀正しく教えます。しかも、高校生が自分が役に立っているという気持ちを持ち

ながら参加できます。一方で、高齢者の方は振る舞いであったり、地域の昔の話であったり、あるいはそれまでの人生で得たことを合間合間にお話しされて、ちょっと情緒不安定な子の情緒が安定してくるということもありました。そういうウィンウィンの関係にあるプログラムをされていて、しかも１対１の関係なのです。

そういう意味では、江幡さんが先ほどからおっしゃっている読み聞かせも１対１の面があると思います。一方で、１対１は何となく怖いですよね。何かあったらどうしようということもあります。でも、それは図書館という安全な場所だからできるという面もあるので、そういった点も図書館でというのは意味があると思っています。ありがとうございます。

では、あとお一方ぐらいお伺いできればと思います。

○粉川氏

香川県立図書館の粉川と申します。今日は有意義なお話をありがとうございます。私もレファレンスカウンターに勤務していて、対面や電話で質問される方は高齢者の方が多い気がします。

たとえば、関東地方から当館にしばしば電話をかけてくる高齢の方がいて、香川県とは関係のない内容のことを質問されます。結構な頻度で電話があり、そのたびに、困惑しながらも話を伺い、「お尋ねのような用件でしたら、お近くの図書館に聞いたら答えてくれますよ」という感じで説明して電話を終えるのですが、数日後、またかかってくる・・・といったことがありました。

また、月に数回程度、夕方に電話で、世界情勢などについて質問される方がいます。この方の質問が、どうも数か月前の質問と同じ内容を尋ねてくるのです。当初は、「以前にも同じことを聞かれましたよね」などと言っていたのですが、最近は特に過去に質問されたことには触れずに、その都度質問に答えるという感じの対応をとっています。

対面では、カウンターで理系分野の専門的なことをしばしば質問される高齢の方がいるのですが、この方も以前と同じことを繰り返し聞いてくる傾向があるのと、閲覧したいと強く要望され、資料をお出ししても、憮然とした様子であまり納得されないことが多い、というのもつらいところです。

以上が思いついた事例ですが、どこの図書館も同じようなことがあるのかと、今回いろいろ話を伺って思ったので、お話しさせていただきました。ありがとうございました。

○呑海氏

ありがとうございます。そうだそうだと共感を持って聞いておられる方が多かったのではないかと思います。お風呂に入らなくなるのは認知症の兆候の一つだと取られることもあります。例えば、福祉部局などとの連携は、個人情報の取り扱いの話にもなってきますが、そういった連携も考えられると思います。

そういう意味では、何のための図書館か、何のためのサービスかということだと思います。「本を破ったりするので、私のお父さんに本を貸し出さないでください」という家族もいらっしゃいます。「お父さんが図書館に入ったら椅子を汚すから、弁償できないので、お父さんが来ても入れないでください」と言う家族もいらっしゃいます。そのとき図書館としてどう対応するのかをあらかじめ決めておかないと、すごく戸惑ってしまうと思うのです。そのときに、何のための図書館か、何のためのサービスかというところに一度立ち返ってディスカッションしておくことが必要かと思います。貴重なお話をありがとうございました。では、最後に一言ずつお言葉を頂きたいと思います。

○岩城氏

昨日今日と、私も皆さまからいろいろなお話を聞いたりして、ありがとうございました。都筑図書館のファン倶楽部の活動に関しては、私たちの図書館もボランティア養成講座のようなものをしていますが、うまく回っていないのです。そこのボランティアを私たち自身が協働という言葉を使いながらも、どこか下請けのように感じていたのかなという反省点もすごくありました。もっと高齢者の方を主にし

たサービスをよく考えないといけないと思いました。2日間、どうもありがとうございました。

○江幡氏

こんなに刺激的でわくわくするような会というのを本当に想像しないで参りました。日頃、図書館でお仕事をしている方たちに私の話を聞いていただいて、まずはとても感謝です。それと同時に、横浜はかわいそうだとしみじみ思います。外に出ていく機会を職員が持つべきだと私は日頃から感じているのですが、その機会があまり持たれないと情報が足りなくて、世の中のことをよく分からないで図書館をやっていくのはとても難しいと思うのです。SNS も使いこなせません。せめて SNS、Facebook も使って世の中のことを見たりするとヒントがいっぱいあるのにと、市民の私たちはとても感じています。SNS、Facebook をやり始めて5年ぐらいになりますが、本当にいろいろな世界が広がって、顔は見ないけど、すごく親しくなっているような関係が築かれます。

ブックカフェの最初のヒントは、イタリアの山岳地帯で三輪自動車におじさんが一人乗っている写真を Facebook で見たことです。なぜかその三輪自動車の屋根が三角屋根で、煙突も付いているのです。それに本を積んで山岳地帯を一人でとことこ走って移動図書館をしているのです。その写真を見たときから、何ていいんだろうとずっと思い続けていたことが今度実現します。だから、世の中にどんどん開いていくと良いのにと思います。横浜の人にそれをどうやって伝えるかというのが課題だと今回思いました。いろいろなことに気付かせていただいて感謝です。ありがとうございました。

○嶋田氏

皆さん、ありがとうございました。私も本当に学びの多い2日間で、岩城さんのお話を聞く前は、「どういうことだろう、分からない」と？マークが付いていたのです。お話を聞いてそういうことかと思いました。このことが本当に高齢化や認知症に対する思いや、そういう偏見というか狭い見方を打破してくれて、誰もが変わっていくということの大切さを教えていただいて、私たちの町でもぜひまねをしたいと思いました。

また、江幡さんのお話を聞いて、年を取るのが楽しみになってきました。私は55歳なのですが、先ほどもお話ししたように、友の会の高齢化に対して組織の若返りをどう図ろうかという考えはそれとして持ちながら、高齢化していくこと、年を取ることをもっとポジティブに楽しく前向きに、年を取るからこそ分かること、気付けることをやるということを、私たち図書館員自身が自分事として感じながら市民の皆さんとお付き合いすると、もっと接し方も楽しくなるのではないかと思いました。

呑海先生には、われわれの発表の中でもう少し包括的だったり、海外の事例も含めていろいろご紹介していただきました。私もメモをいっぱい取ることができて、とてもありがたかったです。また、会場の皆さまからもいろいろなご質問や事例のご報告をいただいて、このテーマは本当にみんなで考えていかなければならないことだととても強く感じました。本当にありがとうございました。

○呑海氏

では、皆さん本当に2日間ありがとうございました。私も大変有意義な時間を過ごさせていただきました。時間がないので一言だけ。認知症や高齢者のことを考えるときに、わが事として考える、自分のこととして考える。認知症になるかもしれないではなくて、年を取れば年齢とともに全ての人が認知症になります。そして、全ての人は年を取ります。年を取ったとき、認知症になったときに、どんな図書館でありたいかというのが一つの視点になるのではないかと思いました。

では、長い時間、ありがとうございました。これでパネルディスカッションを終わりたいと思います。ありがとうございました。

＜情勢報告＞

公益社団法人日本図書館協会
副理事長　西野　一夫　氏

本日は、理事長の森が急な所用のため参加がかないませんでしたので、代わりに私の方から情勢報告させていただきます。

最近の公共図書館をめぐる動向として、4 点報告したいと思います。

最初に、文部科学省生涯学習政策局の改編についてご報告いたします。まず名前が変わります。生涯学習政策局から総合教育政策局ということで、課の数も 6 つから 7 つになるのですが、特に大きいのは人材育成に関するところ、例えば教員免許に関すること、学校司書、あるいは司書教諭の方の免許に関することとか、こういうものが初等中等教育局などから、総合教育政策局に移行いたします。この教育人材政策課という、資格の問題ですから非常に重要なところが総合教育政策局に移行します。

それから、社会教育課と青少年教育課が一緒になって地域学習推進課という名称になります。私どもが親しんだ社会教育課という名前がなくなってしまうということなのですが、社会教育と青少年教育、それから学校図書館を含めた施策をここで一体となってやるという非常に大きな転換が行われます。ちなみに図書館振興係は我々の強い要求に基づいてここに残りました。

こういうふうに、新しい総合教育政策局は名前が変わっただけでなくて、旧初等中等教育局や高等教育局で行われたものの一部を統合いたしまして非常に大きな局になったということです。それを警戒する声もあるにはありますけれども、総合的に継続一体となった政策を行うという、生涯学習と学校教育を連携、融合させる体制が整ってきたということでございます。

次に社会教育施設の所管のあり方についてですが、この問題については文部科学省では、今までも中教審をはじめとして、傘下の生涯学習審議会等でも何回か議論をしてきたのですが、基本的には教育委員会の所管に引き続き置くという議論であったわけですが、今回文部科学大臣から本年３月に中央教育審議会に対し行なわれた諮問「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策」では、「社会教育施設の所管のあり方を含めて検討する」ことが求められました。特に博物館については、「平成３０年度中に結論を得る」ことが求められました。当初は、私どもも今回は博物館だけの問題かもしれないだろうと高をくくった部分もあるんですが、議論が実際始まってみると、図書館を含む社会教育施設全般を首長部局でも所管できるという枠組みをこの時期作る必要があるのではないかという議論が、進んでまいりました。

その背景についてですが、全国の首長さんが作る団体がいろいろな要望をしているわけですが、その中で教育委員会の中の社会教育や文化行政を首長部局でも所管することを可能にしてもらいたいということを、この 20 年近くの間にずっと要求されてきたこと、さらには、少なからぬ自治体からも、同様の要望が矢継ぎ早に上がってきたという背景もあったということもわかってきました。このような背景のもと、生涯学習審議会のもとに特別チームを設けまして、いろいろな角度から専門的な議論が行なわれました。ここで得た方向性ですが、まず現行の法体系その他や今までの実績から見て、社会教育施設というものは、基本的には教育委員会が所管することを基本とするということです。ただし、地域にとってより効果的と判断される場合には、自治体の長が社会教育施設を所管する特例を認めるということです。その特例というのは、自治体のいろいろな情勢の中

で自治体全体の判断で、社会教育施設の一部または全部を首長部局で所管したほうがいいというふうに判断した場合ですが、ただし、それでももちろん法的な整備も必要ですし、条例の整備も必要です。例えば、社会教育法や図書館法それから「地教行法」といわれる教育委員会に関する法律がございますけれども、社会教育施設は教育委員会が管轄することを前提につくられているのです。そうでないものを特例として認めるからには法の改正というものが必要だということと、それから特に議論されたのは、政治的中立性ですね、教育における政治的中立性は学校教育において、非常に柱になるわけでありますけれども、社会教育においてもそれは同等とは言わなくても重要な課題なので、それを担保するための仕組みをつくるということです。

それから専門性です。今ある社会教育主事とか、司書の制度というものが果たして維持されるのかという課題です。さらには住民の意向をくんでいく、図書館でいえば図書館協議会、そういうものが保障されるのか、以上のことを前提として自治体ごとの判断で、特例を認めてもいいのではないかという答申がいま準備され、既に現在パブリックコメントに付されているわけであります。中央教育審議会の答申案については、11 月 22 日に発表されております。皆様も是非ご一読をお願いいたします。私どもも社会教育施設としての本旨を曲げないということを特に強調して、再度パブリックコメントは出したいと思っている次第であります。

3 番目に図書館における障害者サービスの動向でございますが、いわゆるマラケシュ条約というのがありまして、これが 2019 年の 1 月 1 日に発効いたします。これは、盲人、視覚障害者、その他印刷物を通じての情報獲得に障害のある方が著作物を利用する機会をいろいろな形で広げていけるよう促進するための条約です。今回この発効するマラケシュ条約に基づきまして、この条約の趣旨を踏まえて日本における立法措置を行なうための議員連盟が組織されております。そこで、「読者バリアフリー法」と通称されている法案が準備作業に入っており、早ければ今回の臨時国会で議員立法として趣旨説明を行うべく、活発な院内活動が行なわれています。12 月 3 日には、議員連盟が総会開催を予定しており、そこに私どもも招かれておりまして、意見を述べるということになると思いますが、視覚障害あるいは読書されることに障害のある方に対するケアをきちんとするということには大賛成でありますけれども、惜しむらくは耳が不自由であるという方も忘れないでいただきたいというお願いをしたいと思っております。この条約を批准するにあたり国内でいろんな調整をされ、法案ではそれらの方々のケアをするところまで議論が及んでいないともお聞きしておりますが、これについては継続的に取り組んでいただくということを強く要望していきたいと思っております。今後、「読書バリアフリー法」に関連して、図書館でも予算措置その他様々なことで取り組むべきことが増えると思います。私どもも情報提供に努めますので、注意を注いでいただけたらと願っております。

4 つ目でございますけれども、みなさんご存知のように、来年の 10 月から消費税が 10%になります。これについて食料品については軽減税率が適用されるということになっておりますが、食料品が体の元気の素であるならば、心の元気の素は読書ということで、私どもは、出版業界と一緒になって、新聞・雑誌・書籍の軽減税率適用、つまり８％据え置きを要求してきたところです。

業界の力が強いのでしょうか、新聞だけが昨年宅配の新聞は８％に据え置くということが認められたのですが、書籍・雑誌については認められておりません。これについて何とか最後の最後まで頑張って軽減税率を勝ち取りたいということで、各方面に働きかけております。昨日のメールマガジンで群馬県図書館協会から要請文を出していただきました。各県図書館協会にもぜひ協力をお願いしたいということで働きかけをしているところでございます。

この 4 つのことについて、非常にアップツーデイトのお話でありますけれども、ちょうど時間が参りましたので、今日の情勢報告については、これで終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。